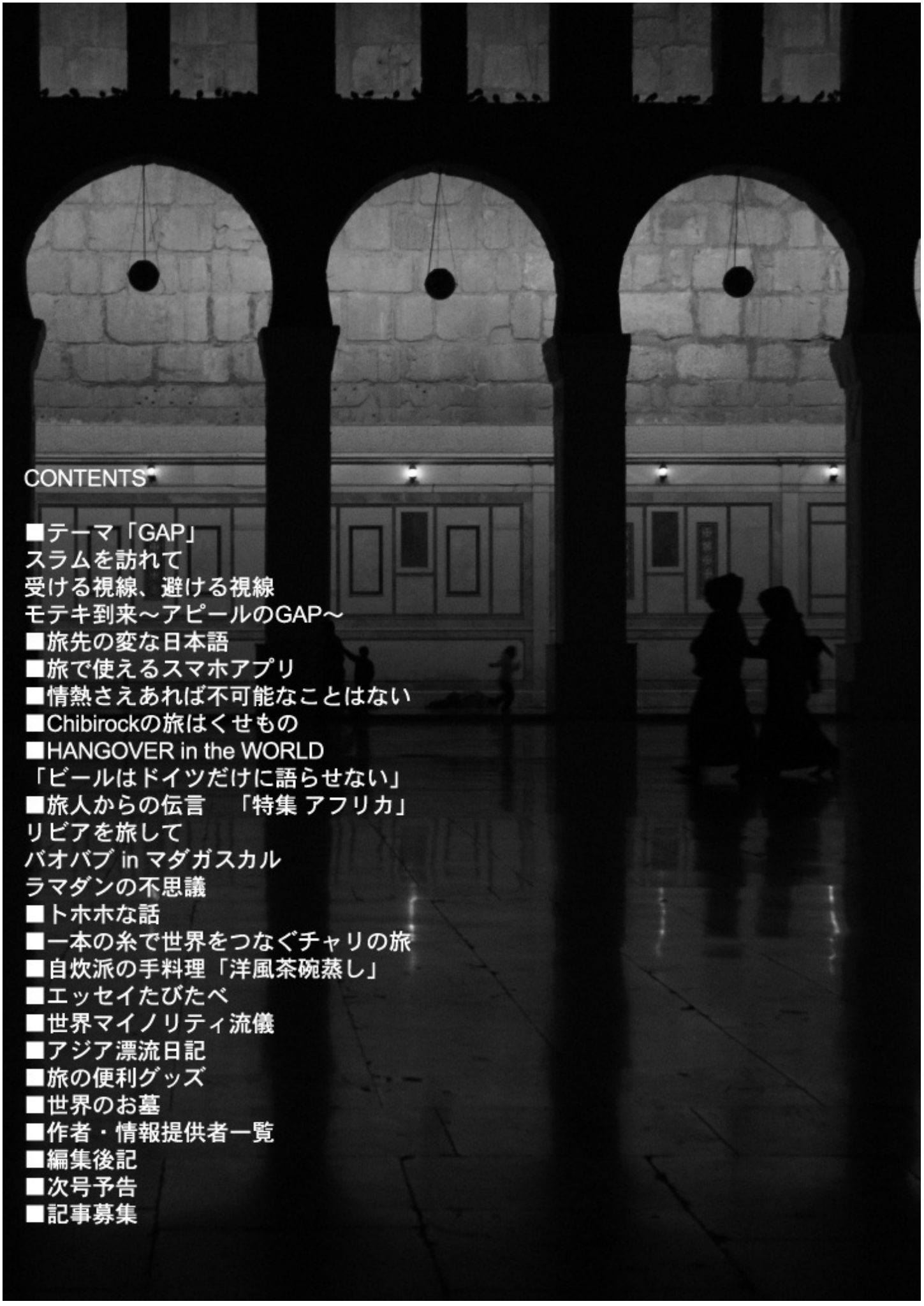
Photo(C)Yusuke

旅人（バックパッカー）が書き、旅人が読む、旅人のための旅ライフフリーペーパーマガジン

BraLi

テーマ「GAP」
旅先の変な日本語
情熱さえあれば不可能なことはない／Chibirockの旅はくせもの
HANGOVER in the WORLD ／
自炊派の手料理
旅人からの伝言　「特集 アフリカ」
世界マイノリティ流儀／アジア漂流日記　他

Vol. 4

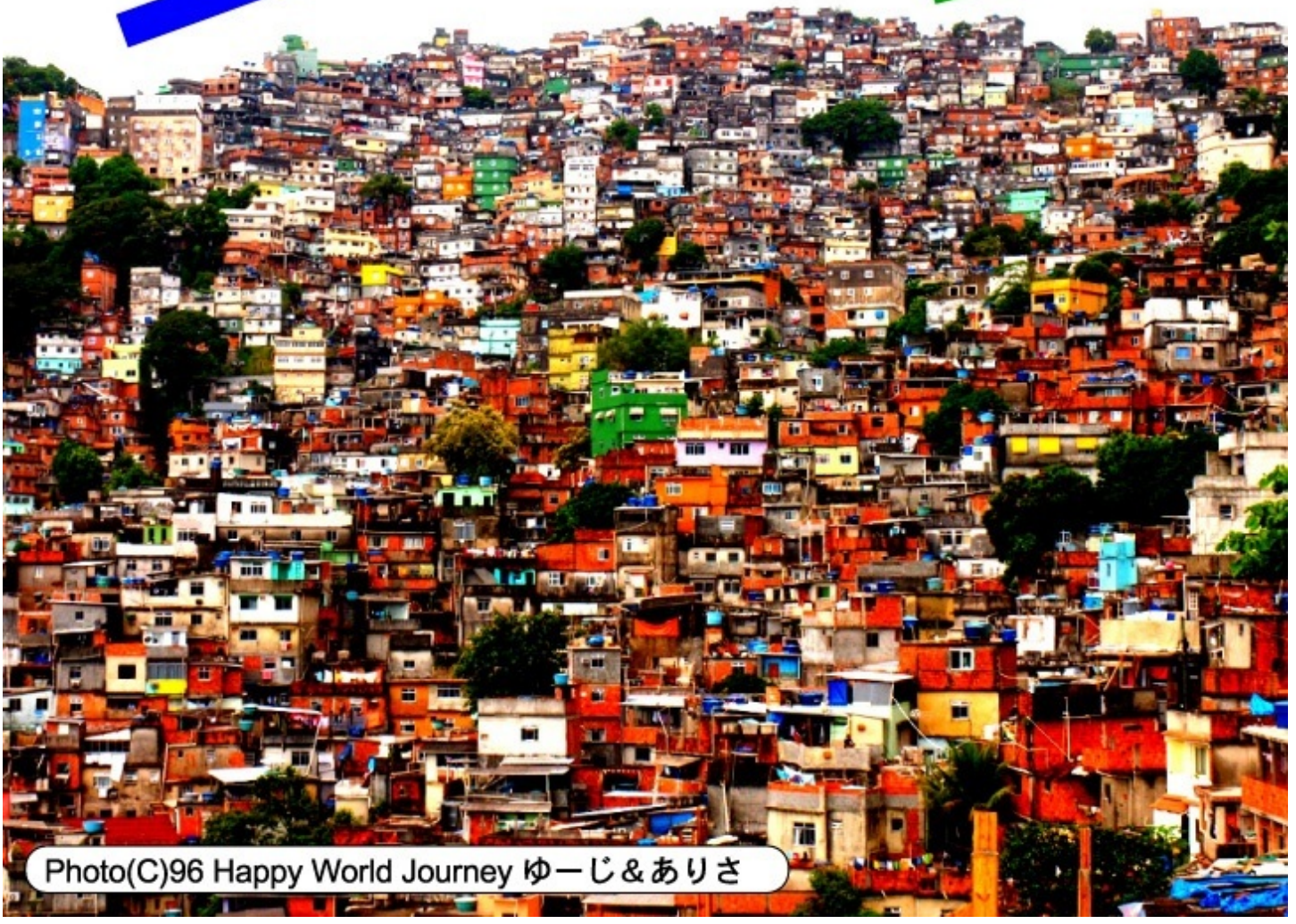


CONTENTS

■テーマ「GAP」
スラムを訪れて
受ける視線、避ける視線
モテキ到来～アピールのGAP～
■旅先の変な日本語
■旅で使えるスマホアプリ
■情熱さえあれば不可能なことはない
■Chibirockの旅はくせもの
■HANGOVER in the WORLD
「ビールはドイツだけに語らせない」
■旅人からの伝言　「特集 アフリカ」
リビアを旅して
バオバブ in マダガスカル
ラマダンの不思議
■トホホな話
■一本の糸で世界をつなぐチャリの旅
■自炊派の手料理「洋風茶碗蒸し」
■エッセイたびたべ
■世界マイノリティ流儀
■アジア漂流日記
■旅の便利グッズ
■世界のお墓
■作者・情報提供者一覧
■編集後記
■次号予告
■記事募集

内から出て初めて感じるGAPがある。
「相違」「ずれ」「隔たり」など。
例えばどこかの国で見たその国の中のGAP、海外から見た日本とのGAP、人の考え方や文化のGAP、世代間のGAP、自分の中でのGAPなど。
今年格差デモで揺れた世界。
旅人は世界でどんなGAPを感じてきてるのだろうか？

世界



Photo(C)96 Happy World Journey ゆーじ＆ありさ

スラムを訪れて

■Writer&Photographer
96 Happy World Journey ゆーじ＆ありさ
■Age
30歳代
■Profile
571日間世界一周終了。
旅の写真・動画・特集・日記などを通して、地球の美しさと旅のわくわくを配信中。 http://96happyworldjourney.web.fc2.com/

「スラム（slum）」と聞くと、何を想像するだろうか？　私の頭にぱっと浮かぶフレーズは、「汚い、貧しい、掘っ立て小屋、犯罪が多い、ギャングの巣窟……」単純に悪い意味の言葉しか出てこない。このイメージは、自分が過去に見てきた映画や報道によって作られたのだろうけれど、一般的に見ても、多くの人がこういうイメージを持っているのではないだろうか。

タイのバンコク、フィリピンのマニラ、インドネシアのジャカルタなど、急成長する街には必ずと言っていいほど連立するビル群の狭間にスラム街が形成されている。しかし、これらの街を訪れても、旅行者の立場でスラムに足を踏み入れることはなかったし、そこは踏み入ることのできない場所だと思っていた。自分とスラム街に住む人々の間に見えざる壁があるような気がしていたのだ。

世界一周旅行中、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロの宿で、何の気なしにツアー情報を見ていたら、映画『シティ・オブ・ゴッド』の舞台ともなった大規模なスラム街「ファベーラ」を訪問するツアーを発見した。観光客だけで立ち入るのは非常に危険な地域だけれど、そのツアーはファベーラで生まれ育ったガイドさんが安全に配慮しながら案内してくれるとのこと。「100％安全」のキャッチコピーにもつられて、参加してみることにした。

ファベーラのある丘のふもとから丘の上までメインストリートをバイクタクシーで移動する。この間は、カメラの使用を厳しく禁止されていた。このメインストリートは密売物資を運ぶルートなので、誤って関係者を写真に撮ってしまうと面倒なことになるらしい。ファベーラの中に入る段階になっても、「建物の前にたむろしている人、銃を持っている人、それらしい人は撮らないように」と忠告される。「建物の前でたむろしている人」は、密売者から雇われている見張り役だそうだ。「銃を持っている人」がいると平気で案内されるし、「それらしい人」という判断基準は難しい。本当に安全なのだろうかと不安がよぎる。

巨大化しているファベーラは、今では人が溢れてもう土地が残っていないため、丘の上の急斜面の岩場にまでへばりつくように不安定に家が建っている。丘には無数の建物が乱立し、その中は迷路のように入り組んでいる。見上げれば、電線が網の目のように張り巡らされ、足元には何本もの水道管がむき出しに配管されている。電気、水道、インターネットは公共のものを各家が無断で引いて利用しているという。排水溝はあるのだが、どこもゴミで目詰まりしていて、雨が降ると汚水が溢れ、洪水のようになるらしい。ガイドさんによると、この地域の平均の子どもの数は１家に７人。12歳くらいで子どもを産み始め、29歳で２人の孫のおばあちゃんということもザラだという。一般的に、スラム街に暮らす人々は定職に就いていないことが多いと思われがちだが、ここでは、多くの人が街の中心部やビーチ沿いのスーパーやホテルで低賃金ながら定職を持っているそうだ。

ファベーラを歩いていると、事前に写真を撮ってはいけないとされた「それらしい人」であろう銃を持った見張り役の青年達に出くわす。彼らの鋭い目つきと彼らが纏っている雰囲気が、すれ違うこちらを緊張させる。家々の壁をよくみてみると、銃撃戦の跡が残っているので、実際に銃が使われることもあるのだろう。

一方、気の良さそうな人、親切そうな人にもたくさん会った。スラムで生まれ育ったガイドさんはすべての住民と顔見知りで、出会ったすべての人と明るく挨拶を交わす。地域全体が暖かいコミュニティのようにも見えた。リオにある400以上のスラムは、すべて３大マフィアに管轄され、それによって良くも悪くも治安が保たれているそうだ。銃を持つ人も確かにいるけれど、スラムの中には商店や食堂や散髪屋さんがあり、日々の生活が営まれるひとつの町という印象も受けた。ガイドさんは、地元を紹介するテレビのタレントのように嬉々として、お勧めの甘味屋さん、絵画で収入を得るための絵の学校、NGOが経営する託児所などに案内してくれた。案内してもらった場所には、明るく力強く生きる人々がいた。

中南米の旅を終えてアフリカのケニアを旅していた時、仲良くなったスペイン人の旅人に首都ナイロビのスラム「キベラ」に行ってみないかと誘われた。このスラムはアフリカで２番目の規模だそうで、人口は60万人とも言われる。ナイロビは、世界的にみても凶悪犯罪が多発することで有名で、ガイドブックにもむやみに出歩かないようにと注意書きがされている。ここにはリオのように親切なツアーは無く、自分だけだったら行こうなんて思わなかっただろうけれど、誘ってくれた人が前にそこに行ったことがあり、昼間は全く問題なく安全で、今回は友人4人も連れて行くと言ってくれるので同行させてもらうことにした。

ナイロビの中心地からローカルバスで数十分の距離にキベラはあり、バスを降りてスラムの中に入って行く。車１台が通れる幅の道路があり、舗装されていないドロドロの道になっている。その脇を何本もの細い小道、泥道が複雑に絡み合っている。泥道の脇にはゴミが山盛りに溜まっていて、匂いがきついところがある。雨が降ると、汚水が溜まって蚊がいっぱい発生してしまうだろうなと容易に想像がつく。

道端には小さな商店がいくつもある。海賊版DVDを上映する映画館らしき小屋があったり、防犯用の柵でがんじがらめにされていて、ノズルだけ取れるようになっているガソリンスタンドがあったり、自宅で作った炭を道端で売っているお店があったり、豚の足先だけを焼いて売っているお店があったりと、アイデア溢れるお店を多々目にする。もちろんそのアイデアは貧しさから来るものだろう。

このスラムの真ん中には線路が走っていて、そのすぐ脇を平屋の家やアイデア商店が隙間無く並んで建っている。この辺りを思うままに歩いていると、かなりの人が行き来する。密集した家々や人口統計の数字が物語るように、多くの人がこの一帯に暮らしているのが実感できる。線路の側でこんなに多くの人が住んで、歩いていて大丈夫なのだろうかと不安にもなる。

ここには、いくつも幼稚園や小学校があるようで、そこの前を通ると、小さい子供たちは「はわゆーはわゆー」と大合唱して集まってきてくれる。全く屈託のない目。素朴な疑いを知らない目に出会えた。単純にスラムの中には学校なんて無いと思っていたけれど、いくつもきちんとした教育機関があることに少なからず驚かされた。

キベラは比較的平地にあり、いくつかの小高い丘があるくらいでそこまで起伏が無い。もちろん高いビル群があるわけではないので、広いアフリカの青い空が近くに見える。そのためかうっそうとした暗い場所が少なく、どこか開放的な雰囲気がある。ガイドがいないので、あまり危険そうなところに踏み込むこともできなかったし、幸運にも銃を持った若者にも出くわさなかったこともあり、リオのファベーラとは全然違う雰囲気の場所だという印象を持つことになる。

世界的に見ても大きな２つのスラムを訪れてみて、その地域が直面する社会問題について考えさせられた。訪れる前に持っていた悪いイメージは、その通りの部分もあったし、そうでない部分もあった。人口過密による衛生状態の悪化、マフィア同士の抗争、ドメスティックバイオレンス、ドラッグ中毒、アルコール中毒など、スラムの抱える問題は様々だが、それらの問題を軽減するための地道な努力もなされている。リオのスラムでは政府が生活水準を向上する努力を始めているし、ナイロビのスラムでは一般的に思われがちなスラムの悪いイメージを変えるべくアート活動が行われている。半日歩くだけでは実際に根付く深い問題までは見えてこないけれど、リオでもナイロビでも純粋な子供たちの目を見ることができて、なんだか安心してしまった。そこに将来の救いがあるような気がした。訪れる前は、踏み込めない見えざる壁を感じていた場所。踏み込んでみると、そこには普通の人々の暮らしがあった。そしてそこは予想外に、明るさと、強さと、未来への可能性に満ちた場所だった。

受ける視線、避ける視線

■Writer&Photographer
黒田麻美子
■Age
（21）
■Profile
津田塾大学中退後、某カフェ店員に。 バックパックを背負って、海外や日本を一人旅するのが好きな旅初心者。時々ヒッチハイカー。2012年10月より、カフェや紅茶/珈琲の産地を巡る一年間の世界一周の旅へ。帰国後は、自身のカフェOPENとカフェ本の出版を予定。
http://ameblo.jp/mamiko96/

飛行機に乗って数時間、そこからバスで揺られること数時間、国境を越えて異国へとたどり着く。
同じ東南アジアと言っても、日本の見慣れた景色との大きな違いに胸を躍らせる。

今日の寝床を求めててくてく歩いていると、英語で書かれた看板を探す目線が、大きなバックパックを背負った旅人を捉える。重い荷物を背負ってるはずなのに、軽快な足取りでだんだんと近づいてくる旅人。表情が見えるところまで距離が近づくと、お互い自然と笑みがこぼれる。そして余韻を残しながら、通り過ぎていく。

旅をしていると、幾度となく経験する場面であり、私が旅の楽しさの一つに感じられる場面でもある。

また、屋台で売られてる食べ物を買おうとしてるとき、前に並んでる人と目が合うと、またにこりと笑顔を向けられる。「美味しそうだね」「食べたことある？　」それが、注文を待つ間のつかの間の会話につながる。彼らの名前も、出身地も、わからない。分かるのは、同じ”バックパッカー”だということ。それだけの共通点が、旅先ではなんだか心強く感じる。それが自然と、出会ったときの笑みにつながっているような気がする。

少し小ぶりになったバックパックを背負って、今度は日本を旅してみる。京都や長崎といった観光客の多いところへいくと、やはりバックパックを背負った旅人を見かける。「ああ、今度は日本人だ。しかも歳も近そう」と思いながら、だんだんと距離を縮めていく。しかし、視線を捉えることもなく、通り過ぎていってしまう。「全員と目が合うわけではないんだし」と思いながら、さらに歩みを進める。幾度となく見かけるバックパッカー。彼らと目があうことはなかった。同じ日本人で、年頃も一緒で、異国で出会う旅人より多くの共通点があるはずなのに、旅で感じた「嬉しさ」を味わえない。

目線が交わらない。笑顔を交わせない。

「視線」「笑顔」異国の地で、あんなに心強さを与えてくれたものに出会えない寂しさ。”バックパッカー”ということで、なんとなく感じられる”連帯感”が日本では、とても希薄に思える。

桜島行きのフェリーで、またバックパックが目に留まる。小柄な女性が、重さを感じさせない足取りで、歩いてくる。

目があうと、微笑んでくれた。

■Writer&Photographer
田中美咲
■Age
23歳
■Profile
少しでも多くの人が心の底から幸せだと思えるよう、対話のプロになる。現在はそのため渋谷で働きつつ、全力勉強中。1988年8月26日生まれ。
KEYWORD:バックパック旅(213日6大陸10旅24カ国59都市)/瞑想修行(Vipassana)/クリエイティブ/前世はインドの姫/ヨガ/コーチング/ゲストハウス
http://ameblo.jp/awesome-misaki/.
Twitter：@misakitanaka

勘違いしてはいけない。勘違いしてはいけない。勘違いしてはいけない。
旅に出ていると女性は、本当にたくさんの人からアピールされる経験を何度もするとおもう。日本でモテキが到来していない私としては、とことん勘違いしうるシチュエーションが海外での旅にはたっぷり詰め込まれている。(いいのかわるいのか……)

南米では、毎日ボニータボニータと言われる生活を繰り返し、アジアでは街を歩けば慣れない英語で「I love you」「cute cute」と言われる。特にインドでは、ただ遠目から勝手に言っているだけならともかく、肩を組んで来たり、かなりセクハラもされる。ヨーロッパに行けば、キスされハグされ、お姫様扱いされ、熱烈な告白をされる。アフリカではいつのまにか第二夫人にされる。

日本では、自分を含めどんなに街を歩いていて素敵な異性がいても、いきなり目の前に立って「かっこいいです！好きです！付き合ってください！」なんて言えない。というより、言っている人を街でみかけたら、ドラマの撮影か罰ゲームなんだろうと考える以外頭がその現状に追いつかないだろう。日本人の多くは周りがどう思うか、相手がどう思うか、こうしたら自分はどう見られるのかを気にして、もともとの欲望を制御することがある。コントロールしているとも言えるかもしれないが、その瞬間に感じた欲求をそのまま言動にうつすことはほとんどないだろう。

しかし、私がこれまでいろんな国や民族、宗教の方々と話したり、その人たちから幾度となくアピールされてきたが、大半の人が日本人とは逆の言動をとっているように思う。日本が『欲求は一度温めてから言動にうつす』ならば、海外は『欲求は感じたその瞬間表現しろ』というように、目の前にタイプの人が現れれば声をかけるし、素敵な人には素敵だと伝える。なんだか一見積極的で、気持ちをストレートに伝えるなんてすばらしいことだ！と思うが、その反面、こういうアピールだからこその問題点が私が知っているだけでも２つある。

１つ目は、既に相手がいる(婚約者・お付き合いしている人など)場合の時に起こる。既に相手がいる人でも、そういう行動をおこすため、さっきまで可愛い！好き！と言っていたと思ったら、また素敵な人が目の前に来たらそっちに行く。女性があまり積極的に交際(もしくは外出)できない国に行った時はそれが顕著で、外で私のような旅行者などに声をかけても奥さんや彼女にはわからない。極端だが、それで現地人の奥さん２人と旅行者５人をGETしたインド人の友達もいる。

そして２つ目は、アピールされる側からすると全く興味のない(もしくはタイプではない)人からも積極的にアピールされるということだ。今までの旅でぞくっとした相手は、挙げさせてもらうと、80歳くらいの杖をついたおじいさんからウインクされて「ボニータ」と言いつつ投げキッスされたり、有名な沖縄出身の元ボクサーのGに似た高校生から「君の彼氏になってあげるよ」とドヤ顔で言われたり、マサイ族の同い年の男の子からは、「第二夫人ならいいよ」と頼んでもいないのに誘われたことがある。今思うと、全員なんて自己中心的な言動なんだ!!!

日本のようにアピール下手で、メールやネットの中でしか発言できないのもどうかと思うが、私が出会った海外の人たちは、アピールが上手という度をこして、とにかくアピールしまくる1000本ノックタイプだ。どちらも極端すぎる。今はどちらも慣れてしまったから随時合わせたり考え方を共有して暮らせて行けているが、なんといっても旅をしていて一番笑ってしまった面白いGAPはこの『アピールの仕方』のGAPだった。

広告

浅草
ASAKUSA

Khaosan Tokyo Guest House

http://www.khaosan-tokyo.com/ja/

日本で海外の気分を楽しめる！

カオサン東京ゲストハウスは、東京、京都、福岡、別府に計8つの店舗を展開しています。
国際交流をしたい！安く快適に泊まりたい！楽しくにぎやかに滞在したい方！
観光、就職活動、一人旅 等、あらゆるお客様に満足していただける宿泊施設です。

TOKYO

- NINJA 1泊/2200円～
- ORIGINAL 1泊/2000円～
- SAMURAI 1泊/2500円～
- ANNEX & SMILE 1泊/2000円～
- KABUKI 1泊/3000円～

KYOTO 1泊/2000円～

BEPPU 1泊/2000円～

FUKUOKA 1泊/2400円～

旅先の変な日本語

海外の旅先で見かける、どう見ても変な日本語。看板やメニュー、商品やチラシに至るまで。笑わせてくれる「変な日本語」をTwitterで集めて見ました。

なんと今回、右図の手直し前の写真が投稿されました。
http://twitter.com/asamna09

よく見ると、誰か手直ししてる。正しい日本語を教える親切心か？
http://twitter.com/lafragoraagla

「唯一の紙タオルはトイレの中でスルーされる可能性が」。なんだか意味深な警告文のようで、どうして欲しいのか？　http://twitter.com/marchenosnos

「外遊は文明を忘れない。買い物をするのは理性を失うはずです」これはことわざっすかね？僕の座右の銘にします。
http://twitter.com/chibirock

旅で使えるアプリ

文字通り旅で使えるスマートフォンのアプリの紹介です。昨今ではスマートフォンやタブレットがバックパッカーの間でも普及し、旅の途中も離せない人が増加中。旅を助けてくれる、旅をもっと面白くしてくれるアプリを紹介していきます。

なぞる距離

旅をしていて、乗り物を使うべきか歩くべきか悩んだことは無いでしょうか？バスやタクシーを使うべきか、はたまた歩くべきか？荷物はそんなに重くないし天気もいいし、歩いたほうが街を観察できてイイ！けど、果たして歩けるくらいの距離かどうか判断できない？

そんな距離なんかを簡単に調べることができるのが、この「なぞる距離」です。
もちろん無料アプリです。

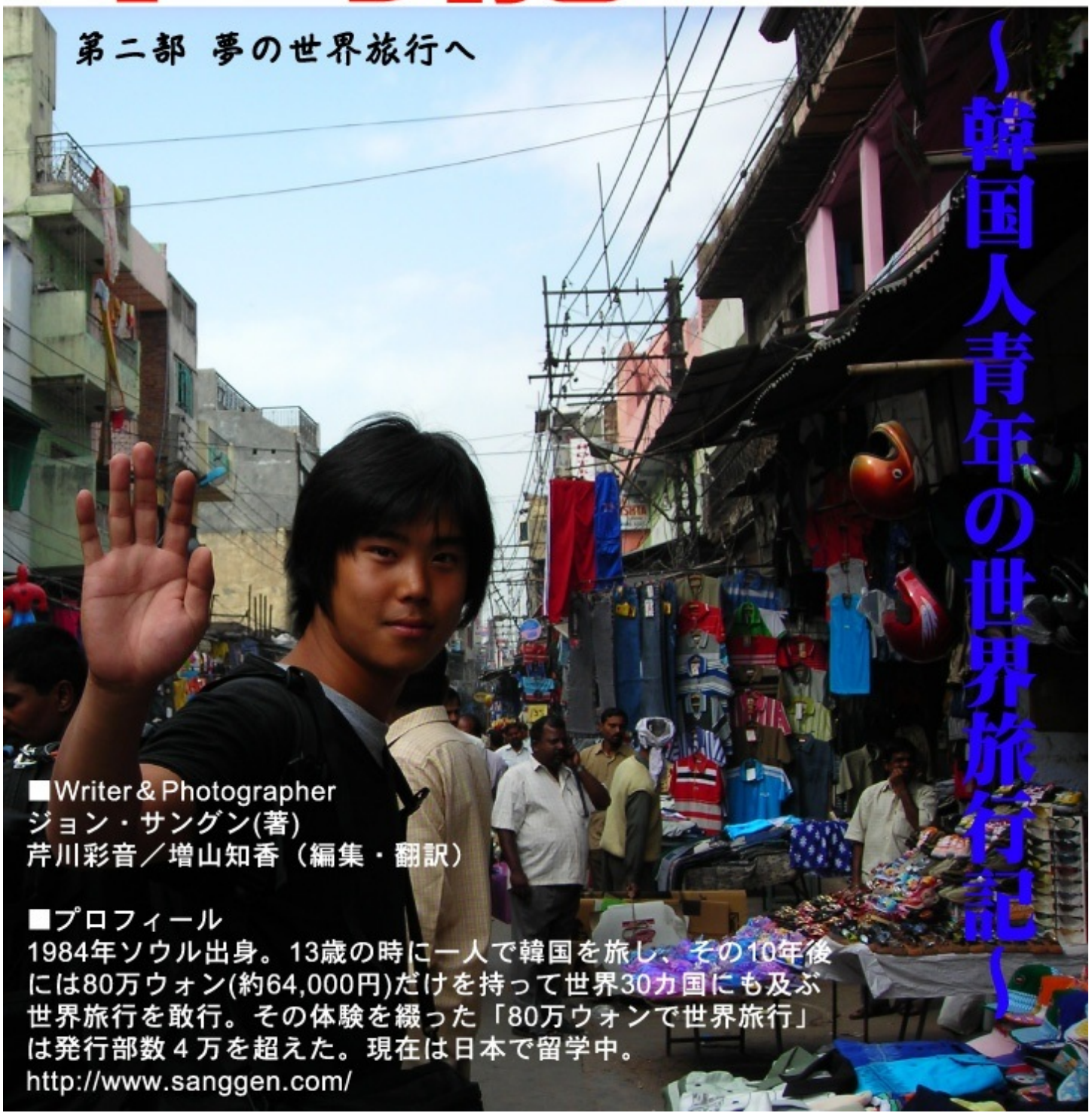
使い方は簡単。
① 地図を開く。
② 計測する出発と到着地点が同じ画面になるよう適度な大きさに調整する。
③ 右下のモノサシのアイコンをタップする。
（アイコンが青色に変わります。）

④ 指で計測したいルートをなぞります。
⑤ すると、なぞると同時に画面下にだいたいの距離が表示されます。
⑥ モノサシのアイコンをタップすれば何度でも計測することができます。

無料でとっても簡単なアプリなので、いろんな場面で使えそうです。
例えば道を訪ねて地図上を指でなぞってもらったり、旅先でジョギングやウォーキングする方は予めコースを決めて走ったり歩いたりすることもできるでしょう。またサイクリングにも向いているかもしれません。

旅で使えるアプリ、知りませんか？「こないだの旅で、こんなアプリに助けられた」、「便利だった」なんてアプリをお寄せください。

情熱さえあれば不可能なことはない



第二部 夢の世界旅行へ

～韓国人青年の世界旅行記～

■Writer＆Photographer
ジョン・サングン(著)
芹川彩音／増山知香（編集・翻訳）

■プロフィール
1984年ソウル出身。13歳の時に一人で韓国を旅し、その10年後には80万ウォン(約64,000円)だけを持って世界30カ国にも及ぶ世界旅行を敢行。その体験を綴った「80万ウォンで世界旅行」は発行部数４万を超えた。現在は日本で留学中。
http://www.sanggen.com/

ついに、待ちに待った軍隊卒業の日がやってきた。辛かった軍隊での生活が終わるということよりも、その時僕は世界旅行に出発できることに胸を躍らせていた。しかし、いざ自分の力で旅に出ようと準備に取り掛かると、知っている人もお金もなく、英語も残念……という不安要素のオンパレード。一度も海外に住んだこともなく、握りしめた80万ウォンが僕の全てだった。それでも僕には、自信と情熱があって、新しい世界に出会うという期待感で、僕の心は今にでも月の国へ行ってしまうのではないかという程に躍っていた。”若き日の不確実な日々の中で可能性を探していく過程は大変だけれど、その経験は確実に意味がある”。こみ上げる不安をこの言葉で自分自身を慰めた僕は、いつのまにか片道航空券を一枚持ってオーストラリア行きの飛行機に乗りこんでいた。

”自分の力で稼いだお金で、堂々と旅をしよう。” 今回の世界旅行の目標だ。そのために選んだのはオーストラリア。僕はここで ”ワーキングホリデー”をして旅費を稼ぐことにした。しかし、オーストラリアでの生活は僕が思っていたように甘くは無かった。午前８時シドニー空港に着き、ひとり空港のロビーに降り立ったとき、初めて旅行の実感が湧くのを感じた。とりあえず無事に到着はしたけれど、これからどうしよう、なにをすればいいんだろう。頭がぼんやりした。行き先や宿など決めているものは何もなく、空港の案内所に入って近所に適当な宿があるかどうかを聞いてみた。案内人は僕には到底理解できないような早口で熱心に説明してくれる。僕が慌てた表情をすると、再び説明しながら電話台を指した。電話台に宿の紹介があるから電話してみろと、ということらしい。電話台の前にはたくさんの宣伝カードと無料電話が置かれていた。見慣れない英語の宣伝を熱心に見て、一番安い宿を発見した。３日以上泊まると、空港から宿までピックアップしてくれるそうだ。僕はすぐに受話器をとった。「Hello、My name is Sanggen……」 その瞬間、僕は黙ってしまった。名前は言ったが次になにを言って良いのか分からない。目の前が真っ暗になった。韓国に居たときには人一倍おしゃべりだった僕が、名前一つも言えずに慌てたりした。

それからのオーストラリア生活でも、韓国を離れて現地で感じた英語の壁は思ったより厚くて固く、僕はまるで頭の中に消しゴムを持っているのではないかと思う程、その青い目を見るだけで言葉が一つも出てこなかった。けれど僕には時間がない。ここオーストラリアで、何が何でも”旅費準備”、”英語能力の向上”、”異文化理解”、この３つを成し遂げなければ、夢の世界旅行には出発できないのだ。

オーストラリアに到着し、まず始めたのは職探しだった。何をするにも、お金がいる。到着した初日から１０時間かけて数百箇所の店に仕事を訪ねて歩き回り、遂にアルバイトを始めるようになった。大変なのはそこからだ。睡眠時間は毎日４時間、レストランのサービングから、大規模な会場の掃除まで、昼夜アルバイトに励んだ。

ようやく仕事を見つけ、オーストラリアの生活も安定期に入った。そこで僕は、本格的に家を探すことにした。僕がもっとも考慮したのは、英語を母国語とする外国人といっしょに過ごせることだった。英語の留学コースに進めなかった僕としては、外国人と苦楽を共にする生活のなかから英語の実力を積む以外方法はなかった。それがもっとも安く、賢い英語の学習法だとも感じられた。それからは町の掲示板、商店の前に貼ってある広告紙を通じて家主と通話もし、訪問して直接借家を見ることもできた。そんなことを繰り返すこと数回、幾度もの電話と訪問のすえ、僕のオーストラリア生活を支えるビタミンのような友人に会った。彼の名前はアンドレス。コロンビア人だ。”ただいま貸家を始めたばかり。ルームメイト募集中”とのビラを貼るや、僕から電話が来たとのことだった。僕はチャンスだと思い、すぐその家を見に行った。今まで見てきた家よりとても立派で、繊細なインテリア、家具、ごまかしではないかと疑うような美しい家だった。僕は彼に何も尋ねず、ただ一言だけ強調した。「この家の唯一の韓国人になりたい」と。彼もまた快くその頼みを受け入れてくれた。それから入居を待つ1週間の間、どんな国の友達と住むようになるのだろうかと期待で胸がいっぱいになった。引っ越し当日、家に到着してベルを鳴らすやいなや、アンドレスが喜んで迎えてくれた。感じの良い姉妹トレイシーとリー、190cmを越すスラリとしたフィンランドの青年ティム、それからアンドレス。僕たちの多国籍同居者生活はこのようにして始まった。

外国人と同じ家に住んだからといって、すぐに何でも出来るようになるわけではなかった。英語の実力も、僕が期待したほど簡単に延びるものでなく、我慢強く学ばなければ進歩はしない。いっしょに住む友達は皆オーストラリアで大学院や大学に在学中で英語は達者で、話のスピードも早かった。なのに僕ときたら、彼らが英語で話すときには首を揺らしながら曖昧に笑うだけだった。この状況があまりにも惨めだったけれど、会うたびに英語を教えてくれとも言えなかったし、友人たちへの親しみを表現することもできず、心配事があっても尋ねることさえできなかった。けれども僕は、この生活の中で一つの教訓を得た。それは一言話すごとに英語に対する恐怖心は消えていく、ということだった。この教訓に従って、僕は少しずつ英語を話すようになった。そうすると、これまで外国人の前に立つと知っているはずの単語さえ消えてしまう”僕の頭の中の消しゴム”現象は、ゆっくりと確実に治っていくようだった。

オーストラリアでの預金通帳の変化を話すと、最初に韓国から持ってきた８０万ウォンは当時のドルレートで１，０００ドル程度。僕は通帳を作ってすぐ、５００ドルを貯金した。最初は全く変化のなかった通帳も、一ヶ月後には１，８００ドルを突破し、１日１７時間労働の末、オーストラリア生活５ヶ月目には遂に、当初の１４倍にもなるお金を貯めた。このようにして、世界旅行のための目標額を約４ケ月の間に貯めることができたのだ。《１２，０００ドル》　たったこれだけでも、僕は大金持ちになった気分だった。今まで酷使された体を休め、わくわくする旅へ出る日は遠くない、と自分に言い聞かせた。世界旅行に発てば、これからは完全に自分だけの時間を持つことになるんだ。

旅行費を確保してからは、本格的にルートを練ることを考えた。旅行ルートを編成するためには本を読み、情報も集めなければならなかった。”知るほどよく見える”と言うが、その言葉通り、勉強してから出発すればそれだけ視野が広くなり、得るものは多かった。僕は一ヶ月の間図書館に通いつめ、本とインターネットを使って旅行に必要な情報を詳しく調べた。心の中には既に世界地図が描かれていた。世俗とは遠くはなれたインド、世界の屋根アンナプルナ山、悠久な歴史を都市の隅々で見られるヨーロッパ、原始の生命力が感じられるアフリカ、それから中東、新しい知識に接するたびにワクワクした。そしてついに、僕の最初の旅行地はインドと決め、出発日も決定した。けれど航空券を買う時、行き先が多すぎてどのチケットを買うのかを決めるのには苦労した。結局僕は、状況によって日程を変えられるよう、世界一周チケットの代りに、オーストラリア→インド→シンガポール→オーストラリアを往復するチケットをやっとの思いで買うことができた。

苦労の末に始まった僕の世界旅行。そこで僕は、すべての文化や生活様式は自分の持っている常識とは違うことを知ることになった。もちろん、最初は理解できないことばかり。最初に旅したインドでも、僕は早速言葉を失うことになる。……どうしよう。カンジス川に着いて僕を迎えたのは黄色い「糞の水」だった。人々はその汚い水のほとりで裸になって、焼いた木の灰を全身に塗ったまま思索するよう座りこむ。その様子を見た僕は（一体あの人たちは何をしてるんだろう。川底が見えないぐらい汚れた水に体を沈めるなんて、清潔、不清潔の区別がないんだろうか？　）と驚きを隠せなかった。

しかし、少し後、僕はその質問を自分自身に問いかけるようになった。僕が思う清潔、不清潔の境界は一体何？
インド人にとってカンジス川は魂を浄化する場所であって、たとえあらゆる汚物が流れていても、人の死体が捨てられたとしても、彼らにとってガンジス川は神聖な心で沐浴する場所なんだ。神に到達しようとするインド人の切ない念願を知らなければ、確かにカンジス川はただ汚い水にしか見えないだろう。このとき僕は、旅行では目を開けてみるよりも心を開くのが重要だと気付いた。ああ、僕は危うく自分勝手に風景を歪曲して、自己満足の旅をしてしまうところだったんだ。

続くネパールでは、自然と人間の偉大さに出会った。世界の屋根と呼ばれる８，０００メートルの雪山を登った時には、大自然から受けた、言葉では表現できない感動を味わった。けれども僕は同時に、忘れることのできない痛みも味わった。

それは山を登る途中に出会った８歳の子供のこと。軽いリュック一つ担いで山を登る僕にとっても大変な道のりを、30kgはあるだろう荷物を担ぎ、古くなったサンダルを履いて黙々と山を登る少年に出会った。聞くと、彼は登山者のために中間地点のコテージまで一日かけて荷物を届けているという。その子が一日中、命をかけて山に登って荷物を届けて受け取るお金は、僕がアイスクリームを一つ食べる金額と同じだった。この山で受けた感動と胸の痛みを、僕は一生忘れないだろう。

また、ヨーロッパではまた違った世界に会うことができた。街はキラキラと輝き、歩くだけで中世時代にタイムスリップしたような気分になる。そんなヨーロッパの街で、僕に”理由のない愛”を与えてくれた人たちがいた。

ベルギーに行ったとき、急などしゃ降りのため雨宿りにと立ち寄った、おばあさんが一人で経営する小さな雑貨店。びしょ濡れで地図を広げる僕に、一杯のコーヒーと「昼食は食べたの？　」とサンドイッチまで出してくれた。しばらく話すうちに雨は止み、また歩かなければならないと告げると「少し店番を頼まれてくれない？　」と言うおばあさん。「もちろん」と店番をすること１０分あまり。おばあさんが買い物袋片手に帰ってきた。「店番ありがとう。お礼にこれを受け取ってちょうだい」。お礼なんて……と驚きながら袋を覗いて僕は更に驚いた。そこにはブランド物のコートが入っていたのだ。あんぐりしている僕に「実は私にもあなたと同じ年くらいの息子がいてね。息子は長い間家に戻らないけれど、元気にしているかいつも心配しているの。あなたを見ていると息子のような気がして、放っておけないのよ。健康が一番だから、温かくして気を付けてね」とおばあさんは言った。けれどもあまりに大きなお礼に、どう報えばいいのか困っている僕を見て、おばあさんは「It's nothing、it's nothing」と言い、「ただ、ベルギーを忘れないでいて」と一言付け加えた。あなたのことを、あなたの国のことを、どうして忘れることができるだろう。おばあさんが僕に与えたのは、単に体を温めてくれる服ではなく、心を温めてくれる愛だった。

　フィンランドに向かう船の中では、フィンランド人の老夫婦に出会った。同じテーブルを囲み、英語が堪能な老夫婦と話が弾む。おばあさんは５０年前にアメリカで研究をしているとき、韓国人のボーイフレンドがいたと話してくれた。現在は２人とも教授を退職し、本を書きながら生活をしているらしい。アジアからお金も無く一人で旅する青年を心配したのか、「どうやって生活しているの？　」「費用は足りているの？　」としばらく質問攻めに合った。すると「フィンランドで仕事を紹介してあげるから、連絡しなさいね」と言われ、そこまで心配してくれなくても良いのにと恐縮しながらも、フィンランドで仕事をするのは良い経験になると思い紹介を受けると、なんと、仕事場は老夫婦の家だった。しかも仕事は書斎での、とても簡単な書類の整理。お金の無い僕の為に、わざわざ仕事を与えてくれたことがすぐに分かった。こうして家族のように過ごした５日間、老夫婦の一方的な助けを受けて当時韓国のお金で６５万ウォンにもなる５００ユーロものお金を手にした。別れの日、深々とお辞儀してから見上げた時に見えた２人の寂しそうな顔を忘れられない。「何かあったらいつでも連絡して」と、僕の姿が見えなくなるまで見送ってくれた老夫婦。僕は、しばらく涙を堪えることが出来なかった。

　旅は出会いだ。多くの人が同じ空間を旅するけれど、皆違う思い出を作る。それぞれの人々の思い出は、”予想外の縁”によって作られる。フィンランドで出会った老夫婦と過ごした時間が、僕にとって旅の間長く、胸を暖かく和らげてくれる大切な思い出になった。この思い出を胸に、これからの旅行がいくら辛くても耐えられる気がする。そんな心強さを僕は旅の出会いで得ることが出来た。

（次回、最終回へ）

チビロックの旅はくせもの

　海外長く行ってきたって言うと、みなさんもよく聞かれるでしょ、アレ。「言葉とかどうしてるの？　」
　実際日本語は日本でしか公用語として使われてないのだから、その疑問も不思議ではないのだけど、「外国語」が海外に行くことへの障害になってるとしたら、This is a pen教育の罪の重さは歴代の横綱全員分を遙かに超えるであろう。
　そんなお前はどうなんだと。はい、わたくしChibirockの場合は、小学生の時分から洋楽と洋画が好きなバタ臭いガキで、英語の専門学校にも通って、TOEICなんかもがんばったりしてましたが、「英語喋れるの？　」と聞かれたら、胸を張って答えよう、喋れません。それ以前に難聴なので、相手が何言ってるのかが結構聞き取れないし、だけど聞き返すのも面倒だから適当に流すし、人見知りだから知らない人と喋るの苦手だし。こう書き連ねてみると、語学身につかない人間のお手本のようなものですね。ちょっと凹んできました。ま、それでもいくつかの局面を乗り切ったからこそ、今こうして元気に生きてる訳で。その数々の局面の一部を恥をしのんでお披露目します。

赤面談の例1：カンボジアから、ツーリストオンリーのミニバンでタイに戻る際、国境のポイペト手前で突然、運転手が振り返って「トボコ！トボコ！」と連呼。するとそのトボココールで同乗者のほとんどが下車準備。まだポイペト着いてないのに？トボコって何よ、トイレ？　何かの極秘ミッションの合言葉？　と、隣の人にあいつ何言ってんだと聞くと、「バンコク、よ」。アメリカに３年留学しても、「トボコ」を「トゥバンコック」と認識できる自信がない。

赤面談の例2：香港にて航空会社ヘリコンファームの電話をした際、「カンッットナンバー」を聞かれた。予約確認メールの隅から隅まで眺めても「カンッットナンバー」らしきものの記載なぞない。「まあ、ちょっと待て」と一旦受話器を置き、少し冷静になり、再度頭をひねるも、「カンッットナンバー」に思い当たるフシがない。怒られるの覚悟でもう一度聞き直すと、やっと聞こえた「コンタクトナンバー！　」電話番号か！　それならそうと早く言えよ！　ってさっきから言ってたんだが、電話番号は「フォウン・ナンバー」だと思い込んでたので、まさかそうくるとは夢にも思わなんだ……だから電話は嫌い。

こんな語学レベルでも、楽しく旅して無事に帰ることができるのだから、「言葉が……」なんてしょうもない心配は無用。ちょこっとテンション上げてサクッと海を渡ろうではないか！

■Writer&Photographer
Chibirock
■Age
33歳
■Profile
Sigur RosとBeirut贔屓のメタル好きバックパッカー。
チベット越えてインドで太って台湾の農家で大豆を選
り分けたり。最近結婚したが放浪やめる気毛頭無し。
http://blog.chibirock.net/

Whiskey Wine Vodka Tequila Sherry Beer Brandy

HANGOVER

～旅先の酒と肴～ in the world

現地でしか味わえない酒や肴の話。その酒場で出会った人の話など。

ビールはドイツだけに語らせない

ロシアでは今年、なんとビールがやっとアルコールになったというニュースはご存知だろうか。
「え？今まではビールは酒じゃなかったの？」と耳を疑ってしまうが、アルコール天国ロシアは今までは１０％未満のアルコールは「食品」という扱いだったのだ。
そのためか、シベリア鉄道に乗った際にKIOSKで購入するビールはみなデカイ。
２リットルや３リットルのペットボトルだ。

確かにシベリア鉄道に乗るとやることがないから、ずっと呑んどけという状況になるからわからないでもないが。（さすがにウォッカをずっと呑んでおくのはつらい）
ちなみにロシアのビール総消費量は１０００万キロリットルを超え世界第３位。一位は中国で二位はアメリカ。

総消費量は人口に比例するけど、一人当たり消費量だと一位になるのはドイツかと思いきや、チェコなのだ。しかもここ十数年連続一位だ。
（ちなみに二位はアイルランド）

Whiskey Wine Vodka Tequila Sherry Beer Brandy

年間一人当たり１４０リットル。約大瓶２２０本分になる。（自分もこれくらいは呑んでるな）
そのチェコビールで有名なのが「ピルスナー・ウルケル」。「原点」という意味だ。
僕は個人的にこのビールが世界で一番美味いと思っている。
（もっと美味しいというビール、教えてくださいね）

ベルギーに行った時は、ビールの品揃えに舌を巻いた。舌鼓を打ったのはもちろんであるが。（ちなみにビアグラスの種類も豊富）
ビール専門店には常時２５０種類のビールが置いてある。
ベルギーのビールは３３０ｍｌの小瓶で売られており、なんでもベルギー人は冷えたビールが好きで、温くなるのを嫌い小瓶で販売しているらしい。
ベルギービールが楽しいのは味に特徴のあるビールがたくさんあるからだ。ピルスナータイプやエールタイプでもそれぞれ濃さや苦味が特徴的で、スパイシーなものもあったり。またチェリービールやベリービールなどの甘いビールもたくさんある。
これは女性に受けるだろう味でついつい飲み過ぎそうだ。

ビールの話をしてたら、そろそろ呑みたくなってきたので
筆を止めて、グビッとしてきます。

旅先のお酒に関して連載できる方、募集中です。　by　編集者

PHOTO(C)大谷浩則

旅人からの伝言

アフリカ

リビアを旅して

バオバブ in マダガスカル

ラマダンの不思議

リビアを旅して

■Writer&Photographer
大谷浩則
■Age
28歳
■Profile
猪突猛進の超不器用旅人。
423日間の海外放浪を実施。
前回の反省点を改善すべく
2012年春再放浪を決意。
Blog:「ウィーリー　海外放浪・地球一周・地球探索　（～人生大満喫の旅～」
http://ameblo.jp/hero23/

「リビア」と聞いて皆さんは何を思い浮かべますか？どんなイメージが浮かんできますか？

私は、リビアと耳にするたびに充実していたリビアの旅を思い出す。良いイメージしかない。特にガダーメスの旧市街は一番印象に残っている。旧市街探索が好きな旅人には一押しの場所である。

２００９年９月、カダフィ大佐革命40周年記念日に私はリビアに入国した。当時のリビアは個人で観光ビザが下りず、ガイド付でないと入国できなかった。そこで、私はチュニジアの旅行会社でビザ申請をお願いした。こういう方法で入国するのは年間４、５人らしい。

９月○日１２時頃に国境の町ラースジャディールの両替商が並ぶ一帯に来てくれとだけ伝えられ、当日を迎えた。この上ない不安だった。ラースジャディールに着き、両替商の周りをウロウロしていると、ガイドが現れた。凄くホッとしたのを覚えている。携帯がないだけでこれだけ不安になる自分が情けない。

さて、ここから私のリビア旅が始まった。通常のリビア旅とは異なっていたのが当時、革命記念日で祝日だったこと。さらにラマダン中で商店が日中開いていないこと。この2点が旅を良い意味でも悪い意味でも面白くしてくれた。

リビア入国後すぐに目立ったのは、おびただしい緑色のリビア国旗。そしてカダフィ大佐の肖像画。これはシリアや、チュニジアに入国した時と同じような感覚だ。（国境付近に国主の肖像画が掲げられているのは中東では珍しくない。

まず向かったのが先述の「ガダーミス旧市街」。世界遺産にも登録されているトゥアレグ族が住むオアシス都市だ。旧市街が見えたとたん「何じゃあ！あれは！？」と叫んでしまった。ガイドは「すごいだろ！」的な微笑をしている。異様に奇妙な形をした家々が並んでいる。私の体から「早く見たい・歩きたい……」というアドレナリンが流れてきた。私はせっかちだ。好奇心をくすぐる旧市街の探索は旅のハイライトだった。

見たことのない形をした家々。2重3重に入り組んでいる通路。屋上から眺めた光景はまさに巨大迷路アトラクション。白色で統一された迷宮。50度を超す気温も気にせず精力的に動きまくった。何度同じ道を歩いても飽きることはなかった。「こんなところに人が住んでいるんだ……」「どういう生活をしているのかな」と、思いを馳せながら歩くガダーミス旧市街。最高の場所だった。

　あまりにも歩きすぎて疲れたのか、途中ガイドが昼寝をしようと提案した。旧市街の一室で昼寝をしたのだ。そこまでは良かったのだが、１つ問題があった。昼寝中、ガイドの右手が私のパンツの中に入ってきた。何度も断るも、しつこく手を入れてくる。ここでガイドとケンカしたらまずい事になるのでうまくかわすのに必死だった。お陰様で触られずに済んだ。たとえガイドだからといって触らすわけにはいかない。中東、北アフリカ地域では「同性愛」的なものは多いと聞いていたが、まさかツアーのガイドがそれか。

　首都はトリポリ。洗練された都市だった。夜の海岸線は夜景が美しく、遅くまで若者が立ち話をしていた。深夜のネットカフェも繁盛しており、にぎやかであった。ただ、当日は革命記念日＋ラマダン。とにかく商店がやっていない。私の晩御飯は深夜1時だった。また、個人で出歩くことはあまり許されず、もちろんカダフィ大佐の肖像画の写真撮影ははばかられた。
　そんなリビアだが観光客はいた。フランスからのツアー客一行は、気球からガダーミス旧市街を眺めていた。日本から新婚旅行でリビア一周している夫婦もいた。旅は出来るのだ。情報が少ないだけだ。もっと魅力を伝えて欲しい。

　2011年リビアで大きな動きがあった。この動きを経て今後どう変わっていくか様子をみよう。いつか観光ビザが簡単に下り、エジプトからリビア入国、チュニジア側で出国が出来るようになってほしい。バックパッカーとして魅力的なルートだ。リビアの人たちの生活・文化をもっと味わってみたいのだ。

バオバブ in マダガスカル

■Writer&Photographer
ワールドハッカー
■Age
31歳
■Profile
元バックパッカーで、現在は職業ハッカー。
ブログ「World Hacks!」にて、海外旅行関連の情報を毎日発信しています。
http://bit.ly/WorldHacks

バオバブを見てみたい。
その地を訪れる理由は単純明快であった。

調べると、世界にバオバブの木は9種類あり、そのうち6種類はマダガスカルでしか見れないらしい。さらにマダガスカルには、「バオバブ並木道」なるものがあるらしい。この情報を知ってから実際この目で見てみたいと思う気持ちが強くなった。そう思い立った半年後にマダガスカルの地に立っていた。

まず、あまり知られていないマダガスカルを簡単に紹介すると、アフリカ大陸の東部に位置する世界第4位の大きさを持つ島にある国であり、首都はアンタナナリポで、人口は約2000万人。公用語はマダガスカル語とフランス語であり、元フランスの植民地で食べ物や建物などの文化はフランスの影響を受けているものが散見される。また、独特な立地条件からバオバブのような植物以外にも動物の固有種が多く、世界中から多くの観光客が訪れている。

話をもとに戻す。バオバブが有名だからと言って、マダガスカルの全土にバオバブが生い茂っている訳ではない。マダガスカル西部にある『モロンダバ』という街の近郊に多いそうだ。そこに「バオバブ並木道」もあるのだという。そのモロンダバに飛行機を乗り継いで到着した私は、「バオバブ並木道」へと車で移動する。マダガスカルの道路事情は非常に悪く、ランクルでも非常に揺れる。旅行ガイドブックには『○○から××へ行くには、車で2日間から7日間必要』と5日間も誤差を見ておかないといけないといった具合だ。

車で揺られていると……出た！

憧れのバオバブの木が目の前にある。しかも、たくさん、独特な形状をした木々が並木道を形成している。一本一本の雄大さも見ものであるが、これほど群生していると迫力が違う。そのシルエットから「巨人が幹をつかんで根こそぎ地中から引き抜き、さかさまに置きかえたものだ」という古くからの伝説があるというのも納得できる。

夕日をバックにしたバオバブ並木道の美しさは何物にも代え難い。雄大な自然風景というものは写真に収まり切らないのは承知していたつもりだが、まるでダメ。必死に撮影を試みたので写真を見ていただきたい。雄大さ、神秘さが伝わればと思う。

翌日、2本のバオバブがお互いに絡みついた神秘的な「ツイストバオバブ」というものを見た(写真参照)。1年に1回ぐらい、人間の形をした大根が見つかるというほのぼのニュースが日本でも流れるが、当然ながらその比ではない。これは「愛し合うバオバブ」とも言われており、カップルでその場を訪れると幸せになれるそうだ。(実は、新婚旅行で訪れていたのです。)

さて、バオバブといえば、サン＝テグジュペリ作『星の王子さま』に星を破壊する巨木として描かれていることでも知られている。ジブリ作品「風の谷のナウシカ」のモデル地と言われているパキスタンを旅しているとき、フンザのとある宿に「風の谷のナウシカ」が全巻揃っているという噂を耳にしたことがあった。

そのような旅人の間で語られる浪漫のある逸話を作りたいと思っていた私は、モロンダバのとある宿に日本から持参した「星の王子さま」の本を置いてきた。旅人の間で、その逸話が噂されていることを期待しているが、きっと語り継がれていることであろう。私にはその噂はまだ届いて来ないが……

冒頭で少し紹介したが、マダガスカルにはバオバブ以外にも魅力的な植物が多く「旅人の木」「鬼に金棒の木」など特徴的な木々や、「アイアイ」「ワオキツネザル」「ベローシファカ」「カメレオン」などマダガスカル固有種の動物も多い。今回はバオバブのことをメインで書いたが、そちらについては別の機会に紹介させていただきたいと思う。

なお、マダガスカルではバオバブは若木が育っていないらしく、現在生えているバオバブが朽ち果てると、バオバブは無くなってしまうそうだ。それは当分先の話になりそうだが、何があるか分からないので、早いうちにマダガスカルに訪れることをお勧めして、本文を終了とさせていただく。

ラマダンの不思議

■Writer&Photographer
96 Happy World Journey ゆーじ＆ありさ
■Age
30歳代
■Profile
571日間世界一周終了。
旅の写真・動画・特集・日記などを通して、地球の美しさと旅のわくわくを配信中。 http://96happyworldjourney.web.fc2.com/

エジプトのアブシンベル宮殿は、公共交通機関でのアクセスが困難な場所にある。自力で行くのが難しいので、アスワンの宿で送迎ツアーに申し込んだ。このツアーは、日中の暑さを避けるために午前中に見学を済ませるのが定番だそうで、早朝３時に起床して宿のロビーに集合するように言われていた。

眠い頭で宿の階段を降りていくと、早朝にもかかわらず、従業員が勢ぞろい。どれだけ早起きなんだと驚きつつ、そのうちの１人が山積みのアラビアパンをテーブルに載せた時、やっと何が起こっているのかに気付いた。

ラマダンが始まったんだ！

これから１ヵ月間、お日様が出ている間、イスラム教徒は断食する。日中の空腹に耐えるため、日の出前の３時過ぎに一度起床して充分にお腹を満たした後、再び床に就くという。そう聞いてはいたけれど、実際に日の出前の食事風景を見るのは初めてだった。

アラビアパンの並べられたテーブルに、おいしそうな香り、湯気と共にフライパンごと羊の煮込み料理が運ばれてくる。すると、従業員のお兄さん達が手招きして一緒に食べようと誘ってくれた。自分達は断食するつもりがないので御馳走になるのが悪いような気

がして、「私達はイスラム教徒じゃないんです」と伝えると、「そんな事関係ないよ。食べて、食べて！　」と招いてくれる。促されるままに席に付き、見様見真似でアラビアパンに羊の煮込みを挟んで口に入れてみた。パンにジュワッと肉汁が染みて、本当においしい。お兄さん達は、私達が喜んで食べるのを見て、安心したかのような、とても嬉しそうな表情を浮かべて、もっと食べなさいというジェスチャーを繰り返す。

　ひんやりした朝の空気を破る、アツアツのフライパンを囲んで、ラマダン前の食事を共にする。断食とは、もっと暗くて辛いものだと思っていたけど、彼らの表情は不思議と反対で、何か楽しいことが起こる前の、期待に満ちたような明るい表情だった。

　その日、私達はアブシンベル神殿を観光し、くたくたになって宿に戻った。疲れや40℃以上もある猛暑と乾燥で喉がカラカラに乾いていたけれど、ラマダン中に冷たい飲み物を買いに行くのはなんとなく気が引けて、部屋に戻って生ぬるい水を喉に流し込んだ。昼食も外に出て食べ物を買うのがはばかられて、結局食べずじまいだった。イスラム教徒でない外国人はラマダンが免除されるとはいっても、やはり我慢している人の目の前で堂々と飲食する気にはなれない。こんなに暑くて乾燥した土地でも、イスラム教徒は一滴の水分さえ口にしないのだ。

　夕方、日沈前に宿のロビーに降りてみると、朝あんなに親切だった従業員同士が口げんかしている。他の従業員も、心なしかピリピリした雰囲気。誰しもお腹が空けばイライラする。朝から何も口にせずの数十時間。日没前はイライラのピークのようだ。

外に出てみると、通りは閑散としていた。ラマダン期間中に空いているレストランなんてあるのかな？　と不安になりつつ歩き回っていると、あるローカルレストランの前に大勢の男性が座っている光景を目にした。テーブルの上にはイフタール（断食を解くための日没後の食事）メニューがずらり。食事を目の前に、誰一人として食べ始める人はいない。

その時、日没後の礼拝を呼びかけるアザーンが鳴り響いた。と同時に、一斉に、ものすごい勢いで食事が始まった。その勢いたるや、「一心不乱に食す」という感じで、見ているこちらはあっけにとられてしまった。そして、食べるのが異常に早い。男性達は、早々と食べ終わると、満足そうな表情で次々に席を立って去っていく。誰も支払いをしていないので、どうやらこのイフタールはレストランが無料で振舞っているものらしい。ラマダン中は、富める者が貧しい者へ進んで喜捨をすることが奨励されているそうだ。

私達がそのレストランを通り過ぎようとすると、お店の人が「君達も食べていきなよ！」と声をかけてくれた。脳裏にさきほど宿で飲んだ水が横切る。やっぱり、一日中飲食を我慢して食べ物を押し頂いている人々の横で悠々とご馳走になる気になれず、ありがたいけど断った。

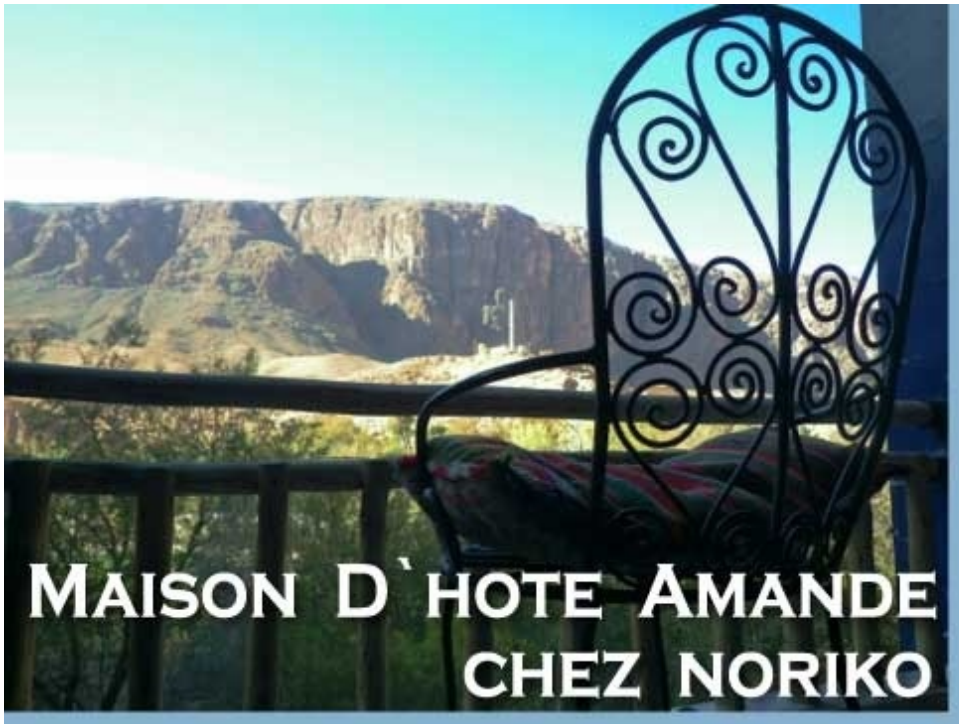
断ったのはいいけれど、歩けど歩けど普通に営業しているレストランが見当たらない。ラマダン中も観光客用のレストランは開いていると聞いていたのだけど、エジプトの治安悪化に伴い観光客自体が減っているせいか、お目当てのレストランが開いていない。ツアーで来る団体客は、ホテルで夕食を済ませているのだろう。ほとんど観光客の姿を見かけない。

しばらく町をぶらぶら歩いていると、やっと普通に営業している一軒のレストランが見つかった。店先では羊のケバブが湯気を立てている。少し飽きてきていた羊料理だけど、ここの料理は格別おいしく感じた。というのも、お店に入ろうとした時から従業員の人たちがものすごくフレンドリーで、特に親日家の店長とおしゃべりしながら気持ちよく食事できたのだ。レストランを探して私達が歩いているうちに、レストランの従業員達もイフタールを済ませて心に余裕が出ていたのだろう。日没前のピリピリした空気から一転して、食後の人々の陽気さといったら別人みたいだ。

知識としては知っていたはずのラマダン。でも、空気を通して感じるラマダンは、もっとリアルだった。朝からがっつり肉料理を食いだめすることなんて知らなかったし、お腹の空き具合であからさまに人柄まで変わるのが見えたのもはじめてだし、排他的な印象のあったイスラム教徒達が食事に招いてくれたのも意外だったし、お腹を満たした後の開放感に満ちた空気もはじめて体験した。

食欲を抑制するのは、私から見ると苦行でしかない。そんな苦行を、世界中の何億人のイスラム教徒が毎年一ヶ月間も当たり前に実行しているなんて、不思議で仕方がない。日没後と夜明け前にドカ食いするのも身体に悪そうだし、お腹が空くと集中力が低下して経済的にも生産性が低下しそうなんて思ってしまう。

でも、ラマダンには、単に飲食を絶つという行為以上の、イスラム教徒にとって精神的に非常に重要なものが秘められているのだろう。それが何であるのかは、コーランの教えを理解し、毎年、世界中のイスラム教徒と一体感を共有しながらラマダンを実行しないと見えてこないような気がする。やっぱりラマダンは私にとって不思議な慣習だ。



<広告>

「モロッコのグランドキャニオン」と呼ばれるトドラ渓谷までのんびり徒歩30分で行ける日本人が経営するアットホームな宿。
バルコニーからは一枚岩が眺められ、手前の畑にはアーモンドの木々が見え春にはサクラのような花が咲き花吹雪を楽しむことができる。

◆料金◆
宿泊代　70DH
朝食　　20DH
夕食　　50DH
洗濯機使用料　10DH

◆設備◆
部屋数4室
サロン
大きめのバルコニー
Wi-Fi
シャワー室・トイレ共同

日本食もO・K

家庭的な
小さな宿

◆住所・お問い合わせ◆
住所
Ait Ousalene Tizgui TINGHIR 45800 MARO
電話番号
＋212(0)6 7040 4369
＋212(0)6 5319 5219
モロッコ国内からは0653195219
E－MAIL
amande@hotmail.co.jp

詳しくはホームページで
http://amandecheznoriko.web.fc2.com

MOROCCO
TODRA GORGE

今だから笑える、本当にあった

トホホな話

旅をしていると、日本ではとてもありえない事に遭遇したりする。
そして、時に泣き、怒り、落胆し、呆然とし、赤面し・・・。
そんな旅の猛者たちのトホホな話をTwitterで集めました。

★　http://twitter.com/OCTOPUSTRAVELJP
二十歳、ロンドンで白人の方が地図片手に近づいてきた。道を聞かれるぞ！ロンドンっ子とでも思ったか？英語で答えてやるぞ！といきまいてたら、「フランス語話せますか？」だってｗｗ。そうは見えないでしょ！一言「話せません」とだけ答えました。トホホで笑える話～。

★　http://twitter.com/shinthesingh
テルアビブのモモズ・ホステル
腐った牛乳流して洗面所詰まらせて、黙ってたら、翌日修理のバイト募集してて、修理したら宿のオーナーからバイト代1万円くらいもらったとか… 今だから言える。あの時はホントすいませんでした。

★　http://twitter.com/ponn_kazuya
トルコ
温泉入ったらみんな水着やったのに僕だけ裸やった。とか。。。
一言で言うと、白い目でした。。。。えらくじろじろ見られてるんで自分の失敗に気づいた感じですw教えて欲しかったwww

★　http://twitter.com/daliwatch
インドの夜行列車で車掌さんにチケット確認のために起こされたとき寝ぼけた状態でチケットを渡したら、車掌と周囲の客が「この列車は逆方向だ」と凍りついた。みると確かに逆方向(帰り)だったので、行のチケットを取り出したところ、客室が安堵の笑いに溢れた。ごめん車掌

★　http://twitter.com/hideto328
初めて一人で海外に旅立った大学4年冬のトルコ、一人旅2日目にしてまんまと絨毯詐欺に会いました。自分のアホらしさと恥ずかしさとで殆どの人には被害額5万円と言っているのですが、本当は25万円でした…。その後絨毯とキリムは無事日本に到着し、今も現役で活躍中です。

Connection1「ハジマリ」

（功甫：功、儀高：儀）

功：誰かが作る料理のにおい、小鳥のさえずり、道端に咲く1輪の花。
儀：ちょっとした変化を感じたり、ちょっとした発見をしたりできるのは、自転車旅ならでは。
功：適度な自転車のスピード。
儀：世界のすべてを、肌で感じながら旅できる。
功：自転車旅って最高！

儀：いやはや、２人で旅を始めてもう5年目ですか。
功：まさか大学で、しかも同じクラスの20人の中に、こんな変態がいるとは思いませんでした（笑
儀：高校時代、ママチャリで残した数々の武勇伝を披露しあったこともありましたね（笑
功：懐かしい！！そこから僕らの旅は始まった訳だからね！

儀：大学4年間で行ったチャリ日本旅。
功：北は北海道、南は九州まで。旅したねー！
儀：そこで出会ったたくさんの人たち、自然の雄大さ。
功：日本旅をとおして、もっともっと自転車旅が好きになった。
儀：そしてもっともっと旅をしたくなった。
功：ならば次は……
儀：世界でしょう。

功：さてそんな2人、実は子どもが大好きなんです。
儀：大学では教育学を専攻。将来は学校の先生になろうと思ったり、思わなかったり。
功：その中で、なーんか子どもと一緒にキラキラ、ワクワクすることができないかなって思ったんだよね。
儀：先生になる前に。今しかできない何かを。
功：そんなことを考え始めたのが3年生の冬。ちょうど日本をチャリで縦断しきった頃。
儀：世界を旅したいなーって思いと、子どもとの企画。まったくベクトルの方向が違う2つの夢。
功：交わることのなかった2つの思い。それがある時ふと閃いたんだよね、「一緒にしちゃえばいいじゃん」って。
儀：とはいっても最初はひどいものだったよね。
功：あれもやりたい、これもやりたいって欲張り過ぎ（笑
儀：当初の企画書なんて恥ずかしくてみれません（笑
功：そうして試行錯誤を重ねたどりついたのが今の企画。

儀：「世界中の子どもを1本の糸でつなぐ」

功：余分な肉を極限までそぎ落とし、辿り着いた答え。
儀：自転車が走った後にできる1本の道筋と、そこにできる1つの長い子どもたちのつながり。
功：これこそまさに僕たちにしかできない企画。

2011.04.20　プロジェクト始動

Connection2「What is CoC?」

儀：人と人との「つながり」
功：今回の旅で僕たちが一番大事に考えていて、一番伝えたいこと。
儀：つながりの温かさ。つながる楽しさ。つながりの大切さ。日本中を旅して僕たちが一番強く感じたこと。

功：つながりのエピソードは本当に沢山あるよね。その中で紀伊半島でのある一つの出会いが、今でもつながりと聞くとふっと思い出されます。
儀：日本でも屈指のど田舎エリア、紀伊半島。
功：雄大な自然が残るこの場所は、僕たちの大好きな場所でもあります。
儀：しかしそんなことはつゆ知らず、軽装備で突入した僕たちはある日、何もない山奥で日も暮れ、食料も尽き、遭難寸前に陥っていました。
功：そこに現れた1軒の小さな定食屋さん。暗闇に1点灯る明かりは、まさに砂漠に突如現れたオアシス。
儀：無我夢中で定食を頬張る僕ら（笑　　そんな僕たちに後ろからそっと話しかけてきたのは、偶然来ていた近くの村に唯一ある、中学校の先生。
功：チャリで旅をしていて、今夜は泊まるところがない、と話すと、先生は「だったら家に泊まればいいよ」と即答。
儀：翌日も学校なのにも関わらず、僕らが先生志望だと知ると、夜遅くまで教師に対する熱い思いを語ってくれました。
功：寝不足の目をこすりながら、「やー君たちと出会えて凄く嬉しいよ」と出勤していった先生の後ろ姿は今でも忘れられません。

功：人は人とつながっていることで、楽しさを感じ、共感し、腹の底から笑うことができる。
儀：お互い支え合い、助け合い、時にはぶつかり合い、生きていくのが人なんじゃないかなって思うんだよね。

功：そんな素敵なつながり、でも今の日本、特に都会ではそれがかなり希薄になっている気がするんだよね。
儀：隣に住む人の顔が分からなかったり、同じ町の人なのにすれ違っても挨拶すらしなかったり、他人の子どもを叱ると逆に親から叱られたり……
功：昔は当たり前だったこと、人とつながって生きるということがあまり大切にされなくなってしまっていると感じました。

儀：だからこそ今、僕たちはつながることのワクワク、ドキドキを改めて伝えたいと思った。
功：特に感じたことを全て吸収する子どもに。これから大きくなっていく子どもに。ワールドワイドなつながりを肌で感じてほしい。
儀：そんな思いから誕生した僕たちのプロジェクト。「Connection of the Children」
功：通称CoC,ココ。意味はそのまま、子どもと子どものつながり。
儀：沢山のつながりと沢山の笑顔を日本から世界に。世界から日本に。

Connection3「How to Connect?」

功：世界中の子どもをつなぐ。
儀：たったそれだけ。それが僕らココのプロジェクト
功：つなぎ方もいたってシンプル。
儀：出会った子どもに1本の短い糸を手渡し、その糸を結んでつないでもらう。
功：前の子どもが結んだ糸の端に、次の子が、そしてまたその先に次の子が……
儀：短い無数の糸が、1本の長い糸になる。その長さが、つながりの印。
功：見えないつながりを見えるつながりに。

Connection of the Children
http://coccoccoc.web.fc2.com

田澤儀高
「横浜国立大学大学院音楽教育専攻一年。ピアノと自転車旅が大好き。小さい頃からチャリで遠出するのが趣味。将来は学校の先生になって音楽の素晴らしさを子どもに伝えたい。そしてユーラシア横断の旅で感じてきたことも。」

加藤功甫
横浜国立大学大学院一年休学中。保健体育科専攻。出会いに感謝し、日々邁進中！つながるって楽しい！！自転車旅/ボルダリング/生花/写真/読書/料理…

自炊派の手料理

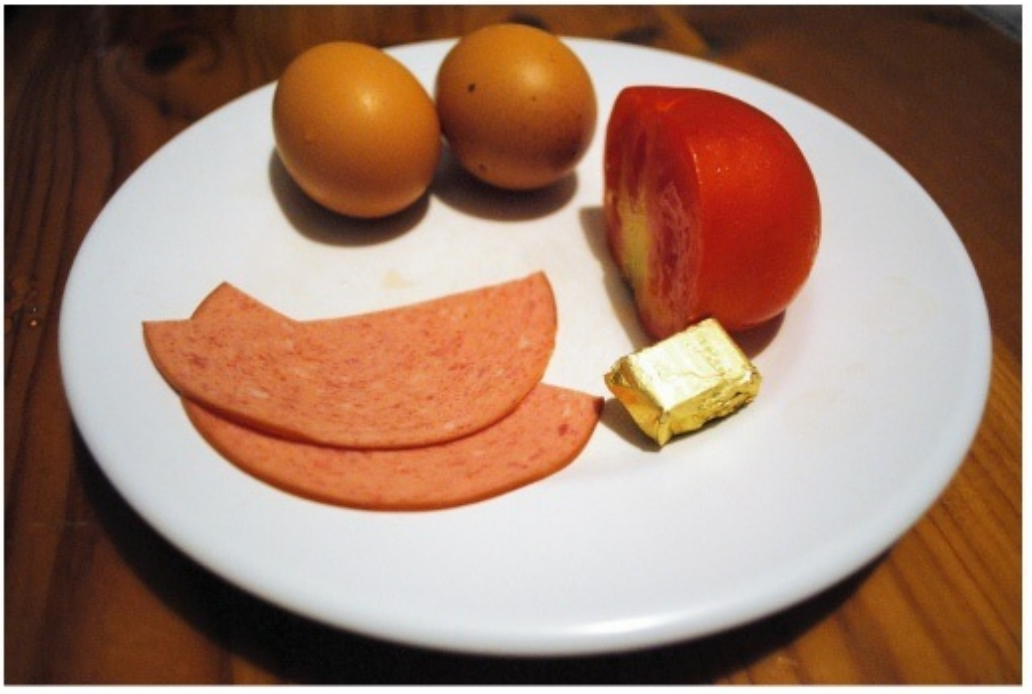
旅に出たら現地の料理を食すに限る。でも物価の高い街での長めの滞在となると、さすがに外食ばかりはフトコロに堪える。そんな時は自炊。簡単で安くて美味しい自炊派の手料理をご紹介。

★ 洋風茶碗蒸し　四人分

自炊が続くと同じレパートリーでたまには違うものを食べたい。
でも、手頃に限られた食材で簡単に作るとなると難しい・・・。
そんな時に、最適な一品。
ふあふあぷるんとした茶碗蒸しが簡単にできます。

材料
■卵・・・・・・・・・・・・・・・・２個
■ハム・・・・・・・・・・・・・・・１枚
■トマト・・・・・・・・・・・・・・ 1/4
■チキンブイヨン・・・・・・・・・半分
■水・・・・・・・・・・・・・・・・３６０ml
■（お好みでオリーブオイル）・・・少々

用意するもの
■人数分のコーヒーカップ
■コーヒーカップが入るくらいのフタのある大きい鍋



作り方

①水（３６０ml）を沸かしてからチキンブイヨンを入れ溶かします。溶けたら火を止めて、冷ましておきましょう。
②その間にトマトとハムは小さく角切り、卵はフォークなどを使ってしっかりと混ぜます。（この時、しっかり卵を混ぜておかないと、出来上がった時にムラができるので注意）
③大きめの鍋に水を入れて沸かします。（鍋の中にコーヒーカップを入れ、カップ半分の高さまで水を入れます。）
④スープが冷めたら、溶いた卵と混ぜ合わせます。
⑤コーヒーカップのなかにトマトとハムを入れてから八分目まで卵汁を入れ、沸騰した鍋の中に並べます。
⑥フタをしたらグラグラと泡がでない程度までかなり弱火にします。
（グラグラと泡が出てしまうと、コーヒーカップが倒れるので注意！）
⑦１０～１５分くらい経ったらフタを開け楊枝などで刺してみて白い汁が出てこなければ完成。（最後にお好みで上からオリーブオイルを少し垂らす）

茶碗蒸しってなんか難しそうな感じがしますが、作ってみると意外と簡単です。シェア飯の時に作ったら喜ばれますよ。卵とブイヨンが余っていたら是非！！

情報提供
谷津 達観(やつ たっかん)
料理一筋！懐石料理で腕を磨き、中華料理店の店長を経て、世界一周の旅に！現在、夫婦で旅に出て９ヶ月。一年の予定で現地の食材や料理を学びながら旅をしています。食べるのも、作るのも大好き！
「家から徒歩１年☆たっかんとじんみ２人世界一周」
http://ameblo.jp/worldjourney2010/

【ブラック・ジョーク・バロット】フィリピン

それはフィリピンの首都、マニラのパサイ地区にある闘鶏場の中だった。

闘鶏場出入口の近くの広場に、串焼きの煙がもうもうと立ち込めている。何故かそこで売られているのは鶏の串焼きばかりで「闘鶏で負けた鶏はここでバーベキューにされるのか？」と半ば本気で思った位だ。しかし闘鶏を見た後で鶏肉を頬張るなどと、ブラックジョークもいいところなのだが……これも細かい事は気にしないフィリピン人のバハラナ(大丈夫、問題ない、何とかなるさの意)精神なのだろうか。

その串焼きに紛れてアルミフォイルに包まれた卵が見える。もしや？と思い、卵を指差し売店のおばちゃんに「バロット？」と尋ねる。こんなところに来る日本人が珍しいのか、なぜか半笑いの売店のおばちゃんは「ソウダ」とばかりにうなずく。おお！こんなところで噂のバロットに出会えるとは……

バロットはベトナムでは「ホビロン」とも呼ばれ、要は孵化する直前のアヒルの卵のゆで卵だ。これから産まれて来ようとするヒヨコちゃんをぐらぐらとゆで卵にするなんて、日本人には残酷に感じてしまうような調理方法だが、東南アジアではわりあいとメジャーな料理だ。ただし外観のグロテスクさ故にアジア通でもこれを食べれない人は多い。もちろん天の邪鬼な俺はフィリピンに来たら絶対にコイツを食ってやろう！と息巻いていた。

１５ペソ（３０円）をおばちゃんに払い、バロットを受け取る。ほぉ……大きさが少しばかし大きめな事以外は、普通の鶏卵のゆで卵と変わりはない。特筆すべきはその熱さ。何故か殻が熱くて触れない位熱いのだ。

熱くて手こずっていると、やはりこんなものを食う日本人が珍しいのか、わらわらと現地人が集まってくる。その中のひとりのおっさんが「殻に穴を開けろ」と言うので熱いのを我慢して殻に穴を開ける。するとおっさん、自分の手を上に挙げるジェスチャー付きで「中のスープを飲め！」と言うではないか。ええい！眼をつぶってヒヨコちゃんスープを飲む。むわっ！ゆで卵の硫黄臭と何となく生臭さのあるスープ。

それを見てギャラリーが「おおー」と声を上げる。何だかちょっとした有名人気分だ。次に殻を慎重に剥いていく。思ったより普通のゆで卵だな……って！うわわーっ！やっぱり微妙に頭やら目玉らしきものが見える！おいおい心霊写真かよ！？

俺はさっきまでの威勢はどこへやら。「ナムアミダブツ……成仏しろよ」と心の中で呟きながらバロットをかじる。ほぉ？これは……カニ味噌のように限りなく濃厚な黄身の中に、ところどころナンコツのようにコリコリしている部分がある。今までに味わった事の無い味わいと食感！一度知ったらハマる味だな！

ただ……
コリコリしているのが一体どの部位なのか、深く考えなければ……だが。

世界メンズファッションの流儀（スタイル）

私たちはブルガリアの
薔薇の谷カザンラクに
住む民族よ。
バラから精製される
オイルは主に香料
として出荷するの。
バラ祭りは
とても有名よ。

僕たちは
エチオピアの
ウェイト川流域
に住むエルボレ族。
顔の化粧が決まってる
だろ～！

Photographer
Sayaka
１００カ国訪問を目指し、
世界の秘境、民族、珈琲
を求めて女一人旅。現在
６１カ国。
「WORLD JOURNEY」
http://ameblo.jp/sayaka821/

ウンナンどっぷり、はやくも沈没の危機《中国・大理編》

■Writer & Photographer
Chibirock
■Age
33歳
■Profile
Sigur RosとBeirut贔屓のメタル好きバックパッカー。
チベット越えてインドで太って台湾の農家で大豆を
選り分けたり。最近結婚したが放浪やめる気毛頭無し。
http://blog.chibirock.net/

創刊号の
アジア特集
からの
スピンアウト
連載

こういう雑な国にいると、いろんなことがどうでもよくなってきます。

3元ケチって買った安いパン、味を一言で表すと、「速乾」。それで１日トイレ行かなくてもよさそうなほど全身の水分もってかれたり、隣の人が、炭酸ジュースを降りまくってそっとキャップを開くという行為を繰り返してたり、ドア無しトイレで用足してる最中に、おばちゃんに真正面で待たれてみたり、バスの乗り場もバスがどこに着くのかも、どこでどのバスに乗り換えるのかも、最後にどこに着くのかわからなくても、どうでもいいというか素で気にならなくなってきた。

なんか、一人って時には寂しくなるけども、一人の方がいろんなことすんなり受け入れやすいような気がしている。

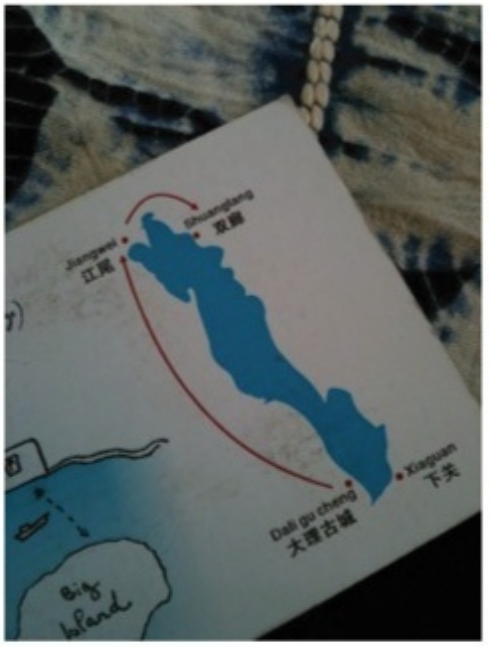
そうこうして着いた、大理。めっちゃ来にくい割に、来てみりゃカフェありバーありミリタリー屋あり携帯屋あり……の超ツーリストエリアで、そこらじゅう中国人旅行者であふれかえってるじゃないかよ！　重い荷物持って車ガンガンの車道歩いて埃まみれになり、そこかしこで大理行きバスの聞き込みしたり、あの結構な苦労が嘘のようだ。

しかしまあ観光客であふれかえるだけあってきれいなところで。綺麗に整備された道の端には小川が流れ、五重の塔みたいな観光地ぽいものもきちんと存在し、街は碁盤の目になってて迷いにくい。ダラダラと散歩するには丁度良い大きさの街。

昨晩宿で、近所に住んでる中国人と韓国人のカップルと、オーストラリアとかフランス人のオーナーとかで飲んでたんだけど、韓国人カップルのおじさんが、「フレンドシップ！　」を連呼して、どこへでもただで連れてってくれると言う。昔アメリカで、たまたま一緒に旅した日本人が、いつだかの首相の息子で、日本に自分が遊びに行った時、渋滞だらけの東京を、ヘリコプター飛ばして度肝を抜かれたとか抜かれてないとか。とかいろいろ旅先でお世話になったので、お金関係なしに旅行者を助けてあげたくてしょうがないと。それはほんとにありがたい。ありがたいのだが、イチオシするプランが、標高４，１００メートルの裏山を、６時間かけてのトレッキングという、「行く行く」とは即答し難いやつだったので、「行きたいところみつかったら電話します」と言っておいた。

女のひとり旅だから、と、心配してくれ、カップルの女の人が、これからあなたが行く街に知り合いがいるから、と連絡先を教えてくれたり、おごってくれたりと、親切にしてくれた。アドリブ力アップの修行のつもりで旅に出たのに、行く先々でいろんな人によくしてもらって、感謝でいっぱいの日々……あたしも返そう、この御恩。

翌日、ファットボーイ・スリムで踊ってた僧侶に、「あんた僧侶か」と話しかけたら、カフェに招き入れられた。そこのフランス人オーナーに聞いた、湖対岸の村、双廊。彼、フレッドが言うには、対岸の宿「Sea and Sky Lodge」から見る景色がヤバいとのこと。歩き方にもロンプラにも載ってないんで、何があんのかどうやって行くかもわからないけど、果たしてこの雑な地図でたどり着けるのか、試してみる価値はあるだろう。



とゆことで、大理に着いたばっかなのにすでに暇というヒデ君とともに、その謎の村に向かうこととなった。江尾に行けばきっと次のバスがあったりするよね。というノリで北へ。見渡す限り稲田とトウモロコシ畑。すこぶる広大なのに、機械とか一切見当たらない。この広さ、全部手作業とかでやってっから、そこかしこトウモロコシがカラッカラに死んでんじゃないかとも思うが、そのやる気に拍手。なんとなくバスを降ろされ、乗り合いタクシーで亀田興毅ばりのヤンキー面の赤子と体面しながらしばし進む。江尾らしき街で降ろされるも、バス停なんてのはないのでそこらに止まってるバンの運転手と値段交渉して乗り込む。そこかしこ工事中で、尻がたびたび浮くほどの悪路。途中道を塞がれてみたりなんやだが、こんなところに「Sea and Sky Lodge」なんていうオシャレな宿はあんのかい？

ここだよと降ろされたところは、少数民族の衣装をまとったオバちゃん達がひしめく「雲南の巣鴨」。野菜とか解体したての豚ちゃんが転がる市場をふらふらと。ちょっとした子犬の毛レベルのカビが生えた豆腐らしきものは、青カビチーズが見慣れた日本人でもひっくり返る外観。こんな毛むくじゃらのものを食ってみようとしたチャレンジャーの顔が見たい。

こっちに宿ありますという看板があったので、お、ここか？　と路地を抜けてみると……宿どころか、だだっ広くどんよりとした沼地以外何もないジャマイカ！　後ろを振り返ると、無造作に、しかし一応保管されているらしいチャイナっぽい建物と、魔界村のごとく山肌に建ち並ぶ墓石。何なんだろうここ。

少し進むと、フレッドが言ってた、フランス人が経営するカフェが見えてきたが明らかに閉まってる。世捨て人のようなオーナーは申し訳なさそうに、すまん今日は改装中なんだと言う。さすがこんな辺鄙な場所にカフェ作ろうと思うだけある、その手の雰囲気はしっかり醸し出している。

　ま、いっか。見つけただけで満足だよね、ってことで、なんとなくバスを探しつつぶらぶらと、していると、向こうの島に、リゾートホテルみたいのが見える。こんな荒涼とした場所に、何を求めて？　殺人事件とか起きて島を行き来するボートがなくなって電話線も通じなくなる用の島にしか見えないんですが、さっぱりこの島が向かう先が見えない。なんだか特にパッとしたこともなかったが、あの地図でここまでこれた達成感で、お互い満足なのであった。

　で、帰ったら、カギもらってない部分のカギが閉まっててスタッフ叩き起こすハメになった、というオチで。

　部屋間違ってあてがわれ、カギ間違って渡され、パスポート返し忘れられ、レセプションのカギ閉められ出れなくなり、PC使い始めたとたんぶっ壊れ、ランドリーバスケットは置き忘れられ、シャワーで水浸しになって服びしょ濡れになり。
　人はすごいよかったのに、こんなに相性の悪い宿、生まれて初めてです。

　てか、嫌がらせ？　いやそんなことはない。そんなことは。

ありえない風景に爆笑《中国・虎跳峡》

大理からバスでやってきたここ麗江は、ビーフジャーキー屋とチチカカみたいな民芸品屋と食べ物屋ひしめく箱庭。数日の滞在はさっさと終わり、最後の夜。「なんとかかんとーか、トーキオー！」

もう一度言うがここは中国、麗江です。世界遺産に登録される、美しく古い街。中心部は夜でもギラギラした観光客のためにギラギラし、ジュリアナをそのまま真似した雄叫びをあげるDJは、ここはトキオではないことを理解しているのだろうか。

美しく古い街で、そんな雄叫びを聴きながら、至極冷静に中国の行く先を憂う我々。いつかはバブルもはじけるよね……でも、中国人だったらなんとかなるんじゃ？　そうだね、そうだよ。

大理からよく一緒につるむ俊さんとジェイ君は、長江が一番最初にでかいカーブを見せるという、タモリ倶楽部ネタみたいな場所に行くと言って、中国人を爆笑させて去って行った。そしてあたしとヒデ君は、シャングリラに北上する途中、虎跳峡という、なんかすんげ深い峡谷に寄ってくことにした。

バス代わりのバンに乗り、片方は「落石注意」看板立てるのもばからしくなるくらい落石しまくりの岩肌、片方はガードレールなしの大絶壁という、いつでも死ねそうな悪路を行くこと数時間。到着したここは、写真に収めきれないほどなんもかもがでかい谷の真ん中。でかすぎて、山見る度に爆笑するほど。でかすぎて、写真じゃ伝わらない。

ひとまず、谷の底まで降りてみよう。想像以上に荒いけもの道を降りる降りる。落ちてるマンガみたいなカボチャに笑ったり最初はしてたけど、だんだん、生きて帰れるか不安になってくるくらいに川底につかない。時折現れる、ひとけのない今にも屋根が落ちそうな休憩所が、余計に不安をかきたてる。ここで足とか折って動けなくなったら、生きて帰れるんだろうか？

１時間近く降りたあたりで、ようやく川底に到着。ハゲしい急流、雲突き抜けてそびえる山々、人間のちっささを思い知らされ、ビビりまくりの我々。口が開きっ放し。
ここ、「地球」だ。
実感した。朝に通った橋がはるか遠くに見える。
帰り道は別の道から、５０メートル思いっきり垂直なハシゴをのぼり、息止まるかと思う急斜面を登り登り、呼吸困難で死ぬ手前で公道にたどり着いた。ほんと久々に死ぬかと思った。

夜は満月を見て。死ぬかと思ったけど、ついでに来ただけの場所だったけど、今日はほんとにいい日だった。

中国ってよくも悪くもすごすぎる。何かっちゃいちいちでかいんだから、そこに住む人間が細かいこと気にしないのは当たり前だ。

非常に幸せな中秋の名月な１日でした。

そして巨大マニ車に苦笑い《中国・シャングリラ編》

小さな街をぶらぶら。クラフトセンターみたいなとこで模様の意味を教えてもらったりして、へえセンスいいよねえなんて言って外に出たら、目の前に回転する巨大な黄金のマニ車が現れると同時に、隣のバーからラブサイケデリコが流れて来て、我々は混乱する。
落ち着け、ここは中国。

とりあえずあのおかしなマニ車見に行こう、と、向かうとそこそこ心臓破りの階段。さすが富士山と同じくらいの標高だけあって、息きれまくり。辛い。マニ車というのはよくチベットの人が持ってる赤ん坊のガラガラみたいので、回すとお経を唱えたことになるとかならないとか。だから展望台よろしく、あれも常に自動で回転させてるんだろうね。
で、息切らせて階段登りきった我々が見た、驚愕の光景。

……人が回している！！

この巨大でチャチなマニ車を、少数民族のおばあちゃんと観光客が２人で、根元に取り付けられている手すりを掴んで全身の力を込めて回している！　どうやら入れ替わり立ち替わり、なんとなく誰かしらが回転に参加しているようで、結構止まることはない様子。我々も適当に回転の輪に加わり、お経を唱えた気になり満足。夜は夜でギラギラにライトアップされるこのマニ車、B級観光スポット認定です。

翌日、皆でナパ海という湖まで、１０キロちょいのサイクリング。肺活量が多分幼稚園児並のあたしは、初っ端の坂道こぎはじめで死ぬかと思ったが、虎跳峡でもっと死ぬかと思うの体験済みだから、がんばった。そしたら、やっぱり死んで天国に来てしまったかと思うような風景が拝めた。死んでるならそれでもいいとすら思う風景だった。

南下して東南アジアに行く予定だったが、なんだか流れでチベットに行くことになりそうです。

旅の便利 GOODS

旅に持って歩く基本的なグッズとは別に、意外と役立つとか、この地域に行くなら便利など、人によって便利なグッズを知ってたりする。これから旅にでる人はご参考までに。（投稿によりますので、かなりな個人的見解になってます）

■方位磁石

もともとは、腕時計に付けられるもの、という但し書き付きで投稿がありました。道に迷った際は、行くべき道や変えるべき方向がおおまかに判断できるので便利ですね。普通の方位磁石なら100円ショップにも売ってますし、最近ではスマートフォンにも入ってますので使わない手はないでしょう。

情報提供者　http://twitter.com/27tsuna

■塩こんぶ

これは意外と盲点だったかもしれない。日本食をたまには食べたい方は、よく味噌や醤油を持参すると聞きますが、液体などの持ち込みにうるさい飛行機も塩昆布は文句を言わないでしょう。もんで浅漬、お湯を注いで塩こぶ茶、和風野菜炒めと活躍すること間違いなし。

情報提供者
http://twitter.com/200604

スウェーデン

ノルウェイ

アイルランド

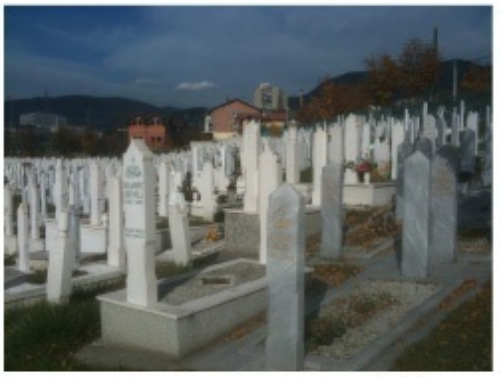
イスラエル（パレスチナ自治区）

世界のお墓コレクション

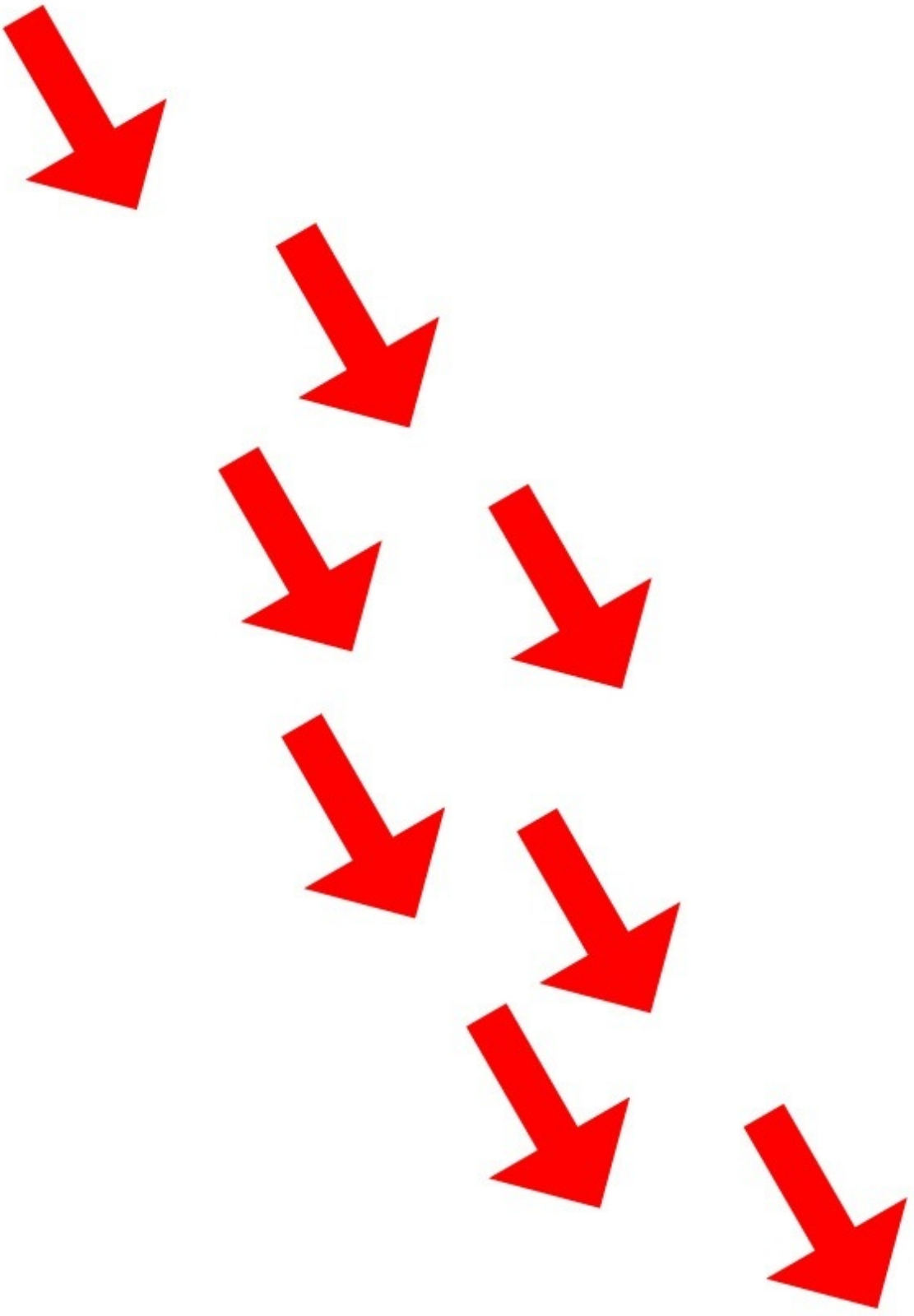
インド

フランス

トルコ



ボスニア・ヘルツェゴビナ



これ、つい拡大して見てしまいましたか？
あなたはもう既に広告のワナにハマっているのかもしれません。

Braliでは広告掲載を募集しています。お問い合せやお申込みはブログからどうぞ。

作者・情報提供者一覧（**Bralist**）

「GAP」中表紙写真
「GAP」スラムを訪れて 本文＆写真
旅人からの伝言　「特集 アフリカ」ラマダンの不思議　本文＆写真
96 Happy World Journey ゆーじ＆ありさ
571日間世界一周終了。
旅の写真・動画・特集・日記などを通して、地球の美しさと旅のわくわくを配信中。
http://96happyworldjourney.web.fc2.com/

「GAP」受ける視線、避ける視線 本文＆写真
黒田麻美子
津田塾大学中退後、某カフェ店員に。 バックパックを背負って、海外や日本を一人旅するのが好きな旅初心者。時々ヒッチハイカー。2012年10月より、カフェや紅茶/珈琲の産地を巡る一年間の世界一周の旅へ。帰国後は、自身のカフェOPENとカフェ本の出版を予定。
http://ameblo.jp/mamiko96/

「GAP」モテキ到来～アピールのGAP～ 本文＆写真
田中美咲
少しでも多くの人が心の底から幸せだと思えるよう、対話のプロになる。現在はそのため渋谷で働きつつ、全力勉強中。1988年8月26日生まれ。
KEYWORD:バックパック旅(213日6大陸10旅24カ国59都市)/瞑想修行(Vipassana)/クリエイティブ/前世はインドの姫/ヨガ/コーチング/ゲストハウス
http://ameblo.jp/awesome-misaki/
Twitter：@misakitanaka

情熱さえあれば不可能なことはない　本文＆写真
ジョン・サングン
（芹川彩音／増山知香　編集・翻訳）
1984年ソウル出身。13歳の時に一人で韓国を旅し、その10年後には80万ウォン(約64,000円)だけを持って世界30カ国にも及ぶ世界旅行を敢行。その体験を綴った「80万ウォンで世界旅行」は発行部数４万を超えた。現在は日本で留学中。
http://www.sanggen.com/

Chibirockの旅はくせもの　本文＆写真
アジア漂流日記　本文＆写真
Chibirock

Sigur RosとBeirut贔屓のメタル好きバックパッカー。チベット越えてインドで太って台湾の農家で大豆を選り分けたり。最近結婚したが放浪やめる気毛頭無し。
http://blog.chibirock.net/

旅人からの伝言　「特集 アフリカ」　中表紙写真
旅人からの伝言　「特集 アフリカ」　リビアを旅して　本文＆写真
大谷浩則
猪突猛進の超不器用旅人。2009年4月から423日の海外放浪を実行。来年再放浪計画中。
Blog:「ウィーリー　海外放浪・地球一周・地球探索　～人生大満喫の旅～」
http://ameblo.jp/hero23/

旅人からの伝言　「特集 アフリカ」　バオバブ in マダガスカル　本文＆写真
ワールドハッカー
元バックパッカーで、現在は職業ハッカー。
ブログ「World Hacks!」にて、海外旅行関連の情報を毎日発信しています。
http://bit.ly/WorldHacks

一本の糸で世界をつなぐチャリの旅　本文＆写真
Connection of the Children
http://coccoccoc.web.fc2.com
田澤儀高
「横浜国立大学大学院音楽教育専攻一年。ピアノと自転車旅が大好き。小さい頃からチャリで遠出するのが趣味。将来は学校の先生になって音楽の素晴らしさを子どもに伝えたい。そしてユーラシア横断の旅で感じてきたことも。」
加藤功甫
横浜国立大学大学院一年休学中。保健体育科専攻。出会いに感謝し、日々邁進中！つながるって楽しい！！自転車旅/ボルダリング/生花/写真/読書/料理…

自炊派の手料理　本文＆写真
谷津 達観(やつ たっかん)
料理一筋！懐石料理で腕を磨き、中華料理店の店長を経て、世界一周の旅に！
現在、夫婦で旅に出て９ヶ月。一年の予定で現地の食材や料理を学びながら旅をしています。食べるのも、作るのも大好き！
「家から徒歩１年☆たっかんとじんみ２人世界一周」
http://ameblo.jp/worldjourney2010/

エッセイたびたべ　本文＆写真
沢井ブルース
人生武術と旅しかないちょっとかわった男です。

世界マイノリティ流儀
Sayaka
１００カ国訪問を目指し、世界の秘境、民族、珈琲を求めて女一人旅。現在６１カ国。
　「WORLD JOURNEY」
http://ameblo.jp/sayaka821/

表紙写真
YUSUKE
海と山とカメラが好きなB型の元薬剤師。世界の絶景を求め、2010.10.10より旅に出る。アメリカ・中南米・アフリカを旅して１年経過。旅２年目は写真の腕を磨きながらアフリカとユーラシア大陸を無計画に進む。
Blog『FreeFlowLife』
http://ameblo.jp/solitary-cloud-el-mar/

協力
向井通浩
JAPAN BACKPACKERS LINK 代表・運営管理者 。「ハニートラップ研究所」所長。タイマッサージ依存症。ホワイト餃子。
http://backpacker-link.com

広告
カオサン東京ゲストハウス
http://www.khaosan-tokyo.com/ja/

Maison D'hote Amande chez noriko
http://amandecheznoriko.web.fc2.com/

編集後記&次号予告（２０１２年２月２５日発行予定）

編集後記

今回１２月１０日に「Brali編集会議という名の飲み会」という集まりを東京新宿で催した。
名の通り、本当に編集会議という名だけで、全然編集に関係なく旅の話に終始しました。
それはまるで安宿のサロンやコモンルームさながらの様相でした。
今まではネット上だけの一投稿者、一読者、一編集者という点がつながって
有機的なものを感じました。
今後も東京だけでなく、開催して行こうと思ってます。
ご興味のある方は、ぜひご参加ください。

次号予告（２０１２年２月２５日発行予定）

■テーマ「旅で気づいた幸福論」
■旅で使えるデジタルアプリ
■情熱さえあれば不可能なことはない
■HANGOVER in the WORLD
■Chibirockの旅はくせもの
■旅人からの伝言 「特集　ヨーロッパ」
■トホホな話
■一本の糸で世界をつなぐチャリの旅
■旅の便利グッズ
■自炊派の手料理
■エッセイたびたべ
■アジア漂流日記
■世界のコレクション
■旅先の変な日本語
■世界マイノリティ流儀
■台湾人よ、たくさんの義援金ありがとう！
■今から計画、ゴールデンウィーク弾丸バックパッカー

記事と情報および写真の募集要項

記事と情報および写真の募集要項

次回のBraliの発行予定は２月２５日です。
下記の記事や情報をお気軽にお寄せください。ご応募いただきました中から厳選させていただきます。

★記事および情報
■テーマ「旅で気づいた幸福論」
今年はブータン国王が来て独自の幸福指標について語られ、日本でも指標づくりを始めたとか。「あなたは幸せですか？」旅先で見かける超明るいスラムの子供達。逆に１４年連続で自殺者が３万人を超えるニッポン。　「いったい幸福ってなんなんだ！？」。
→１５００字から２０００字程度
■旅で使えるデジタルアプリ　→旅で役に立ったアプリを教えてください。
■HANGOVER in the WORLD　→旅先での酒や酒場にまつわるショートコラムをお待ちしてます。
■旅人からの伝言 特集ヨーロッパ
→１５００字から２０００字程度
■旅の便利グッズ　→旅で便利だったグッズを教えて下さい。
■変な日本語→海外でよく目にする「変な日本語」。写真とどこで撮影したかを教えて下さい。

★写真
■Brali表紙用写真

記事投稿および投稿に関するご質問はメールにてお願いします。
bralimagazine@gmail.com

Brali

●公式ブログ

http://bralimagazine.blogspot.com/

●Facebookページ

http://www.facebook.com/Bralimagazine

●mixiページ

http://p.mixi.jp/brali

●twitter

http://twitter.com/2moratorium

編集：くりはらのぶゆき

発行：くりはらのぶゆき